

8th HC-APYLS

~Igniting Change, Igniting Hope~

From July 14th to July 22th in Singapore



麻布高等学校 筑波大学附属高等学校



Preface

麻布高校 四元 春輝

夏休みの10日間、僕たち高校2年の6名はシンガポールで行われた APYLS という世界の高校生のサミットに、日本代表として参加しました。この文集は、その全記録です。僕たちが異国の地を見て、聞いて、感じたこと。それを一人でも多くの人に知ってもらおうことが、この文集を作った目的だと考えています。

第1部は **Introduction**、APYLS と今年の日本代表6人の紹介です。APYLS とは何か（実際僕も行く半年前まで知りませんでした）、今年の日本代表はどんな面々なのかを簡単にまとめました。ここを読むことなしに先を読み進めても、もしかしたらあまり理解できないかもしれません。ちゃんと読んでから、先に進みましょう。

第2部は **What We Did**、僕たちが実際に何をしたのかです。一介の高校生だった僕たちが日本代表に選ばれ、シンガポールへ行き、帰国してこの文集を書くに至るまでに僕たちがしてきたこと、その全てをまとめました。この文集の核にあたる場所ですので、じっくり読んでもらいたと思います。

第3部は **Feedback**、各人の感想です。僕たちがこの APYLS を通じて何を感じたのかを、ざっくばらんに綴りました。6人ともそれぞれの個性が出ていてもおもしろいと思います。これから APYLS に行くであろう後輩へのメッセージも込めましたので、行く前にぜひ読んでみて下さい。

最後に、この文集が僕たち6人のいい思い出になろうことを、そして何より、これを読んだ後輩が APYLS を志し、人生における素晴らしい経験を積めることを心から願って、序文としたいと思います。

2014年8月29日

APYLS から早40日を迎えようとする日に

Contents

Preface.....	1
I. Introduction	3
What is APYLS?	4
Delegates of Japan (2014)	7
II. What We Did	9
Preparation in Japan	10
Program	12
Summit Dialog	33
Student Dialog	35
III. Feedback	43
Students	44
Don't forget the teachers!	74
Postscript.....	78

Chapter I

Introduction

What is APYLS?

APYLS とは、Asia Pacific Young Leaders Summit の略で、シンガポールの Hwa Chong Institution が主催する、アジア太平洋青少年リーダーズサミットのことである。毎年7月頃に開催され、今年も8回目。14カ国（オーストラリア、中国、フランス、インド、インドネシア、日本、マレーシア、オマーン、フィリピン、シンガポール、南アフリカ、韓国、イギリス、アメリカ；2014年）の26校から選ばれた高校生（Delegate）が参加する。シンガポールの政府機関に行き、大臣などの識者から話を聞いたり、グローバル社会において人類が直面する大問題について、プレゼンし議論を重ねることで、未来のリーダーとしての見識を深めることが目的である。



	Day 0	Day 1	Day 2	Day 3
7am	Arrival	Breakfast	Breakfast	Breakfast
8am		Opening	Summit Dialog	Summit Dialog
9am				
10am		Ceremony	Housing Development Board	Government of Singapore Investment Corporation
11am		School Tour		
12 noon		Cultural Exhibition	Lunch	Lunch
1pm		Lunch	Media Corp	S.E.A Aqarium
2pm		City/Heritage Tour		
3pm				
4pm				
5pm				
6pm	Dinner	Journal Briefing	Journaling	Dinner
7pm	Mass Interaction	Dinner	Dinner	Student Dialog 2
8pm		Cultural Night	Student Dialog 1	
9pm	Summit Briefing	Preparation		
10pm	Personal Time	Personal Time	Personal Time	Personal Time
11pm	Lights Out	Lights Out	Lights Out	Lights Out

Day 4	Day 5	Day 6	Day 7	Day 8	Day 9
Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast
Personal Time	Land Transport Authority	Community Service	Teambuilding	Summit Dialog	Student Dialog 4
Ministry of Foreign Affairs		Journaling		Science Centre	Journaling
Lunch		Lunch		Lunch	Lunch
Summit Dialog		Lunch		A*STAR	Cultural Night Full Dress Rehearsal
Supreme Court	Public Utilities Board	Art Masterclasses		Free and Easy	Wash up and Change
Journaling	River Cruise				
Dinner	Dinner	Dinner	Dinner		
Cultural Night Preparation	Asian Civilisations Museum	Student Dialog 3	Cultural Night Preparation		Closing Ceremony
Personal Time	Personal Time	Personal Time			
Lights Out	Lights Out	Lights Out	Lights Out	Lights Out	Lights Out

Delegates of Japan (2014)

麻布高校

窪田 直希 *Naoki Kubota*



コミュカの魔術師であり、誰とでも仲良くなるキャラクターの持ち主。彼の知らないところで、世界の女の子にモテていた。APYLS 中、何人もの女の子を泣かせた罪な男(嘘)。APYLS ホームページをもっともよく見た男。他人の良いところに気づいて全力ではめる。とても素直で柔軟で、いつも全力で他人と向き合う感じ。その心が各国の Delegates に伝わったからあんなに人気者だったんだろうな。

吉沢 健太郎 *Kentaro Yoshizawa*

けんちゃん。良識派で、数少ない正当派常識人。シンガポールでは人格が豹変。日本チーム内で一番頼れる人。いつもみんなの意見を集約し調整してくれ、さすがは生徒会長。麻布では数多くのリーダーを務め、そのリーダーシップ、冷静さ、安定感で日本チームをいつも支えていた。でも政治について語り始めるとノンストップ。見た目はおじさん、中身もおじさん(いい意味で)。



四元 春輝 *Haruki Yotsumoto*



天然。純粹無垢でまじめな好青年。ピアノも書道も出来てとにかく多才。シンガポールでは KAWAII キャラを確立した。一見まじめ、実際まじめ。でもとてつもなく肝が据わっている。ファッションショーでののはっちゃけぶりは誰にも真似できません。芯があつてぶれないから、暴走する日本チームの議論をいつも軌道修正してくれた。彼には人を引き寄せる力があつて、多くの人を魅了し大人気だった。

筑波大学附属高校

岩崎 光里 *Hikari Iwasaki*

日本チーム唯一の帰国子女。英仏日3カ国語を操る、語学のスペシャリスト。もはや英語が日本語より得意。一族みな、尋常じゃあない。一方で怖い話が苦手な一面も。ピアノが上手なのには驚いた。よくしゃべる、よく笑う、すごく頑張る。常に目標に向かって全力投球だから、話すのも速いし食べるのも速い。理系のことなら任せて下さい、化学部部长です。



由地 莉子 *Riko Yuji*



頑張り屋日本代表。日本チームのまとめ役。たまにおっちょこちょい、名ツッコミでもある。とてもアクティブ。気がついたら欧米 delegates の中にいるというコミュカの高さ。最初にあった日の自己紹介で「誰よりも APYLS が好きです」といっていたのが印象的。勉強会で睡魔と格闘しながらも、一生懸命説明を聞く力はすごい。Outstanding Floor Speaker Award を日本人で唯一受賞したのは敬服に値します。

濱野 倫太郎 *Rintaro Hamano*

はまりん。野球部感溢れる丸刈り。現地では “It's OK.” ばかり言っていた。うたた寝をしミーティングの開始が遅れたことも。人の話を一生懸命聞こうとし、女子と話すときは基本前屈み(笑)。知的なおもしろさとムーンウォークを併せ持つピッチャー。噂では筑附でもっともバレンタインチョコをもらう男。場を盛り上げることには一流な上、バスの中で小サミットを開くほど社会問題にも熱心。



Chapter II

What We Did

Preparation in Japan

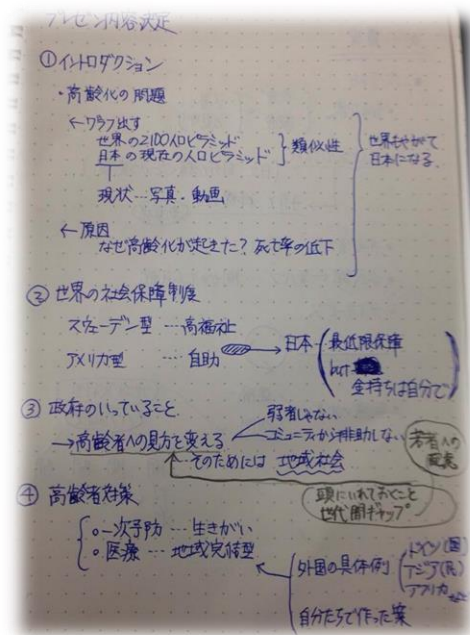
顔合わせ

麻布と附属の生徒は、顔合わせを麻布高校で行った。附属は、集合する駅を間違えたり改札を間違えたりと、なかなか麻布の人たちに会うことができなかった。初回からやっちゃまった附属チームだが、麻布チームは全く怒らず終始ニコニコしていた。

会合を重ねる

初回の会合はその後のスケジュール調整を行い、その次からプレゼンの内容や Cultural Exhibition について話し合った。何回も会合を開き、議論を重ねるうちに、メンバーみんなの深い知性に驚き、そしてこんな優秀な人たちと知り合えて自分は幸せだなと感じた。時には議論がまとまらず、お互い何を言っているのかわからなくなったり、日本チームが何を求められているのかわからなくなったりして、とても重い会合になったときもあった（特に印象にのこっているのは、話し合いがまとまらず、皆で前庭に出てぶらぶらした時のことだ。あの時はつらかったが、あの時期を一緒に乗り越えたからこそ、日本チームの固い絆が生まれたのだと思う）。

時には買い出し（+観光?）に行くときもあった。浅草で食品サンプルを探したり、要もないのに西新井大師に行ったり、そこで知らないおばさんの演歌を聴いたり。これらのこと・苦しかったことも含めて、準備のこと全てが、思い返すのが楽しい思い出だ。繰り返しになるが、何回も会合を重ねたからこそ、日本チームの結束があった。忙しいとは思いますが、これから行く人たちも、出来るだけ多く会合を開いてください。そしてみんなで一緒に苦しみ、楽しみ、やって下さい。



その他

ここからは、準備の段階で大切だと思ったこと列挙していこうと思う。

➤ 荷物

- ✓ スーツケース：スーツケースは早めに準備しておくこと。今年は、出発の朝空港でスーツケースを買った人がいました（まあ、逆に言うと最悪それでも間に合うということにもなるんだけど）。
- ✓ 上着類：あっちのエアコンは本当に尋常じゃないです。ヒートテックを着て寝た方がよかった（もちろん上にはセーター・トレーナーなど）。
- ✓ 薬類：強力な胃薬を。正露丸なら通常タイプではなく「糖衣 A」を。
- ✓ コンセント：コンセント変換器は一人一つ配られるので買っていく必要はない。

➤ お金

僕たちの前の代までは、現地の学校で「お小遣い」をもらっていたらしいが、今回はそのようなものはなかった。来年からもないかもしれない。現金は多めに持っていこう。割合としては、シンガポールドルを一万円相当分、そして日本円で 2,3 万円を持っていくという感じだろうか。そんなにいらないだろうと思うかも知れないが、外で昼食を食べる時や、市中を移動するとき（交通機関が意外と高い）なんだかんだ費用が掛かる。万が一のことも考えて多めに持って行った方が無難だろう。両替のレートは、シンガポールの方が圧倒的に安い（1, 2 割も！）。両替所は、市中のデパートやモールに比較的多くあるので、そちらを訪れる予定がある場合には、日本であまり両替をしていかない方がよいかもしれない（ただし、セントーサ島には両替所なし）。

- インターネット関係：寮ではフリーの Wi-Fi が使えた。3 日に 2 日くらいの割合で、パソコンを使う時間を与えられるので、最低限、インターネットを使う時間は確保できるだろう。ただ、スマホやタブレットを持っていった方が、調べ物や友達との連絡をするうえでかなり便利だろう。

備えあれば憂いなし。これから APYLS に行く人は、念入りに準備をしていってください。あと、荷物の準備はお早めに。僕は出発当日の朝 3 時までかかってしまいました。

Program

Day 0

午前中

麻布の 3 人は一日前に到着していたので、朝食の後すぐ観光に行った。まず近場のボタニックガーデン（南国の植物が生息する公園のような所）へ行ったのだが、とにかく暑かった。地下鉄で涼みながらオーチャードロード(銀座のような所)へ行くと、日曜日だったせいか人混みがすごかったため、伊勢丹や高島屋に行くまでもなく、くたくたになりながら帰ってきた。

オーチャードは横断歩道がないので注意したい。



暑かった！ ボタニックガーデン



人混みに紛れて。セブンイレブン!?

午後

午後は南アフリカの 3 人とバスケをした。とても楽しかったのだが、屋外のコートだったためやはり暑く、10 分と経たないうちに皆ノックアウト。時間こそ短かったものの、英語に慣れていなかった僕たちにとって、最小限の英語(パス、シュート程度の)で仲良くなれたのは良かったと思う。

夕食の時間にはほぼ全員が到着しており、ダイニングホールもずいぶん賑やかになってきた。そんな中、筑附がなかなか到着しなかったのには焦ったが、みんなが食べ終わった頃に何とか到着し、ほっと一安心。

筑附は例年のごとくかなり遅い到着。部屋に荷物を置く暇もないまま最初のプログラム **Mass Interaction** へ。麻布は仲良く他国の **delegate** と座っていてうらやましい限り。先生に交渉して、到着日を一日早めようとしたが、「贅沢言うな」と一喝。諦めずに来年も頑張って交渉してみてください。

Mass Interaction

最初のプログラム、Mass Interactionは参加者同士が打ち解け合うためのものである。一言で言うとみんなで様々なゲームをするのだが、説明が英語でなかなか理解できず、周りに聞くはめに。最初は良かったのだが、グループに分かれて日本人がいなくなると本格的にわからなくなってしまった。隣にいた親切な delegate が教えてくれたのが本当にありがたかった。ルールを理解したり、外国人の名前を覚えたりするのは、日本チーム共通の悩みの種だったようだ。

でもここで英語についていけなくても落ち込まないことが大切！ APYLS ではディスカッションなどで大勢に向かって話す機会も多いが、バスの移動中や機関訪問の間に一対一で他国の delegate と話すことのほうが比重が高い。みんなとても優しく、理解するまで話してくれるし、話の流れで内容を推測できることが多々ある。英語が出来ないからといって萎縮してサミットをスタートしては本当にもったいない！ どんどん積極的に話しかけていこう！

にこやかにゲームの説明を受ける。



じゃんけんをし、勝ったら変身！ 目指せスーパーマン!!

Day 1

Opening Ceremony

この日は、まず制服に着替えての **Opening Ceremony**、開会式を行った。一介の高校生が、**Delegate**、日本代表であることを実感させられた瞬間である。ファシル（サミットの運営をしてくれる同い年の **Hwa Chong** の生徒）が作ってくれたビデオには鳥肌がたった。これからどんな友達に出会い、何を学び、自分が何を発信できるのか期待で胸がいっぱいになった。このとき講演して下さった教育・司法大臣の **Ms. Indraneel Rajah** とは、後で話せる機会があった。日本の 6 人で挨拶に行き、死刑問題や英語教育についての質問をした。こうした政府要人に次々とお会いする機会がほぼ毎日あり、直接質問させて頂けるのが **APYLS** の魅力の一つである。



Ms. Indraneel Rajah とのお話。英語教育は幼少期から、という何ともシンガポールらしいお答え。

Cultural Exhibition

日本からは、書道用具、剣玉、和菓子、食品サンプル、漫画、国旗などを持って行った。各国とも個性あふれる品揃えで、ドリアンキャンディー、インドの香辛料、オーストラリアの味噌(すっぱ苦い)、オマーンからは入れ墨(?)、インドネシアは記念撮影をやっていた。日本のブースでは、八つ橋が意外と好評だった一方で、あんこはやっぱり苦手だという印象だった。剣玉や名前を当て字で書いてあげる書道コーナーなど実演系はやはり人気!でも、今年の反省は装飾が地味だったこと。富士山の大きな絵などを貼っておいたら目立っただろう!



¹四元の胸元は見ないで下さい。

School Tour

ホワチョンを一通り案内してもらった。感想は、とにかく広い！様々な建物があり、ホワチョンの歴史を展示する記念館のようなものもあったのだが、ホワチョンの歴史のうち、1942年から1945年までの日本占領期が抜けており、空白になっていたのが印象的だった。韓国の Delegates にいきなり歴史問題を振ったところ、まじめな話で盛り上がったのは、いい思い出である。

Boarding School、寮だけでも広大。



City/Heritage Tour

中国のお寺に行ったり、ホーカーズという屋台街でシンガポール料理を楽しんだり、てっぺんが金ぴかのモスクに出かけた。中国のお寺は日本の仏教とは異なる宗派で、お寺やお祈りの仕方、お供え物まで変わっていておもしろかった。ホーカーズでは、スイートコーンや赤や緑のシロップをかけたカラフルなかき氷を、3人でシェアして食べた。ブギスストリートのアイスは1ドルで美味しかった。シンガポールでは定番らしいが、変な味を頼まないように注意しよう。(チャレンジャーはドリアンアイスにトライしてみてもいいかも。本物よりはまだ食べられる…)



How was it? Did you like it? ...It's not bad, but interesting taste...



↑ 中国人街にあったヒンドゥーのお寺

Day 2

Housing Development Board(HDB)

シンガポールの、いわゆる住宅開発庁の見学。82%のシンガポール人がこの HDB の公共住宅（HDBFlat）に住んでいると言うから驚きだ。HDB Flat は日本でいう高層マンションで、入居手続きを住宅開発庁が一括して行っている。もともと多民族国家で、民族によって住む地域が分かれていたシンガポール。HDB という共同住宅で、民族間の交流や社会的に推奨されている **Community Service** を行い易くしている。



新婚さんから老夫婦まで、あらゆる世代に対応しているのが売りらしい。シンガポールのプロポーズの決まり文句の一つは「一緒に HDB Flat を買いに行かないかい？」だそうだ。結構ハイテクな施設で、黄色い部屋に箱が置いてあると思ったら実は核シェルターだったなんてこともあった。政府のトップダウンがしっかりしているなど感じさせられた。

Media Corp

シンガポールで唯一のテレビ局 Media Corp は、いくつものチャンネルがあり、ラジオ局でもあり、交通管理センターでもある。Traffic Watch では、あらゆる道路にある監視カメラの映像を惜しげもなく見せてくれて、プライバシーも何もないなど驚いた。

一通り見学が終わると、お待ちかねのファッションショーである。司会にモデル、ファッションデザイナーや審査員、カメラマン、ディレクターなどに分かれ、指導を受けながら一つの番組を作り上げるのだが、これが結構盛り上がり楽しかった。カメラの機材も本物で、動きがなめらかだった。





真剣に聞いている（が、実は何を言っているかほとんどわかってない）

Journaling

二日に一度くらいある **Journaling** の時間は、パソコン室のようなところで日記を書く時間である。日本人以外は皆、おしゃべりしながらも、ものすごいスピードで英語をタイピングしていく。ただ **Gmail** アカウントさえ持っていれば何とかなるので、その日感じたことや学んだことを、自分の速度で英語にしていけばいいだろう。

この時間でパソコンを使うことができるので、時間に余裕があると **Facebook** やメールで日本と連絡を取ることができる。非スマホの人にとっては貴重な時間。

Day 3

Government of Singapore Investment Corporation(GIC)

ここシンガポール政府投資公社も、政府直属の施設である。世界屈指の投資ファンドである。てっきり経済や投資の話聞けるものと思っていたが、なぜか僕たちにはリンゴやチョコが配られ、リンゴを丸かじりしながら話を聞いた。そんなラフな形式ながらも、

chairman の Mr. Lim Siong Guan のお話はかなり重みがあった。Lim さんは“**You are going to lead the world!**”と何度も繰り返し、リーダーシップについて説いて下さった。「他人の意見に左右されず、自分の周りを observe し、自分の意見を持つ。リーダーは過去の失敗から学び、現在の状況に対応しつつ、将来を予測する力が不可欠だ」とおっしゃっていた。穏やかな見た目とは裏腹に力強い口調で自信にあふれていて、さすが GIC の長だと感嘆した。

次世代のリーダーを育成することを目的としている APYLS に参加している delegates として、Lim さんの若い世代への期待を感じた。



S.E.A Aquarium

セントーサ島にある、最近出来たばかりの世界最大の水族館。魚自体は日本でも見たことあるようなのばかりだが、外国人には物珍しかったようだ。韓国やインドネシアの女の子がセルフィー好きで、彼女らはカメラに取り付けて使うセルフィー専用の棒を持っていたのが印象的だった。皆とはぐれてセントーサマーライオンに行ってしまった者もいたようだが、それはそれで楽しそうであった。



↑ みんなで APYLS!

Day 4

Ministry of Foreign Affairs(MFA)

外務副大臣の Ms. Grace Fu Hai Yien の講演は、ご自身の家族の戦争体験に基づいたものもあり日本のシンガポール占領の歴史を改めて感じた。僕たちの国それぞれの外交問題について話して下さったりと、とても良かったと思う。今話題の集団的自衛権について質問をすると、ドイツの例を挙げ、



日本も「誤った歴史を繰り返さない」と誓ったドイツのように“Clear Message”を持つべきだ、と答えてくれた。

講演が終わった後には各国の delegates とお互いの国の政治・外交情勢について情報交換をした。アメリカの delegate によると、アメリカは長年にわたって戦争をしてきて国内には疲弊モードが蔓延しているようだ。膨大な軍事費の負担も強いられている国民は、これ以上の軍事行動は望まない人が多数だそうだ。逆に日本の沖縄基地の移設問題などについては全く知らなくて、アメリカにとってはそんなに大きな問題ではないのだと感じた。

Supreme Court

最高裁判所の見学……のはずだったのだが、実際の法廷を見せてもらえるわけでもなく、裁判員の制服を試着したり、台本に沿った模擬裁判で遊んだりした。屋上からの眺めも見



せてもらったが、そんなに高いわけでもなくつまらなかった。だがさすがシンガポール。荘厳さと透明性をイメージした近代的な建物で、オフィスのような感じだった。裁判制度は日本とあまり変わらず、最大三回裁判を受けられるようだ。

一部の delegates が模擬裁判すらできず、展望台で時間をつぶすのみとなったのは特筆しておきたい。

←古い裁判所は改修中。

Cultural Night Preparation

Closing Ceremony で披露するパフォーマンス、ソーラン節の練習をした。日本では皆で合わせて練習する機会がなかったので、最初は動きもばらばらだった。皆疲れてテンションがおかしかったのだが、筑附の 3 人はこの日いきなり、2 日後の Community Service の時間にソーラン節を披露するようファシルから頼まれ、練習に熱が入る。

麻布の 3 人は、翌日の LTA で日本の公共交通機関についてプレゼンをするように頼まれたため、ソーラン節の練習が終わった後ファシルのパソコンを借りてスライドを作っていた...

日本人と日本語で話せる数少ない時間なので、心が落ち着く。安心しすぎてテンションが高くなってしまう。

今日の練習は 4 時間もあったが、2 時間も練習するとさすがに疲れたので、残りの時間は全員で麻布の LTA でのプレゼンの作成を手伝っていた。次の日の午前中には本番なので、麻布の 3 人はその後もファシルに手伝ってもらいながら原稿を書き、夜の 1 時まで寝ずに頑張った。



Day 5

Land Transport Authority(LTA)

シンガポールの鉄道やバスといった公共交通機関を運営している行政機関。麻布のプレゼンでは、日本の鉄道が時間に正確であることや、日本の新幹線が海外に輸出されていることや、路面電車が LRT(次世代型路面電車)に移行しつつあることを述べた。

(うまく笑いもとっていて、分かり易い nice presentation でした！ by 筑附) その他にもイギリス、南アフリカ、アメリカがそれぞれ自国の交通事情をプレゼンした。

シンガポールは国の面積が非常に小さいため、車のための道路と MRT (日本の鉄道) といった公共交通機関のバランスが大切で、LTA (交通庁) が一括して交通機関を管理しているのだ。



Public Utilities Board(PUB)

NEWater という水道施設。シンガポールは水資源のほとんどを隣国のマレーシアからの輸入に頼っており、水は貴重である。下水もリサイクルして、安全な飲み水にするのは技術がいるのだな、と感心したが、実は旭化成の技術を使っていたと知り、日本の技術力のすごさを思い知った。

NEWater はまずくはないし、普通に飲める。



River Cruise

シンガポールの中心を通るシンガポール川を 30 人乗りくらいの遊覧船で下った。マーライオンやマリーナベイサンズが見えると、シンガポールに来たのだなという実感がわき、興奮してみんなで写真を撮りを何枚も撮った。River Cruise が終わると、グループに分かれての自由行動。本場のチキンライスを食べたり、「麻布茶房」という名のアイスクリーム屋に行ったり（けっこうおいしかった）した。シンガポールリバーの夜景は最高である！！川沿いに並ぶマリーナベイサンズや高層ビルが見事にライトアップされていて、まさにシンガポールを象徴する絶景だ。ここ 5 日間の疲れを吹き飛ばしてくれたような気がした。



Asian Civilisations Museum

アジア文明博物館は、先の自由行動の続きで、館内ならどこにいても良かったため、皆ほとんど屋外でショーを楽しんでいた。ショーは、中国の太鼓パフォーマンスだったり、日本の歌舞伎とは大違いの「歌舞伎ダンス」をやっていた。



↑各国の美女集結



Day 6

Day 6 は午前中は Community Service で、Hot Park に行くグループと HDB Flat でお年寄りと交流するグループに分かれた。

Hot Park

熱帯の自然を楽しめる公園のような所。暑い中、サイクリングに励む人がちらほらいた。僕たちはというと、ガイドの説明を半分くらい聞きながら、暑い暑いと文句を言いつつおしゃべりをしていた。自然については特に印象に残ったものはなかったが、小さい蝉がいたのには少し驚いた。



Community Service

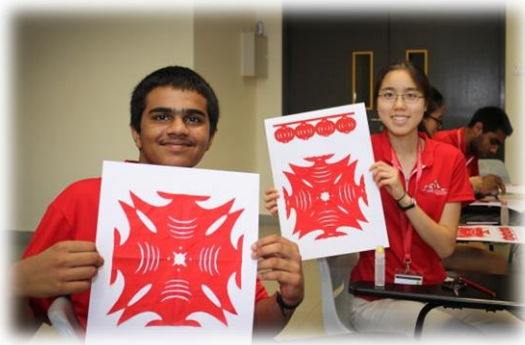
HDB Flat に併設された地域交流センターで、共同住宅に住んでいらっしゃるお年寄りとエクササイズやゲームで交流した。筑附はここでソーラン節のショートバージョンを披露。法被と日本チームで揃えた寿司Tもうけて嬉しかった。しかし、ここでも言語の壁が立ち上がった...お年寄りのほとんどが英語を話せないのだ...中国や



マレーシアの delegates やお年寄りの娘さんが通訳してくれたので何とか意思疎通できたが直接対話できないのは残念だった。また、シンガポールの delegates は、学校で Community Service に従事することが単位として必要なのでとても慣れた様子で接していた。私は初め、何をしたら喜んでもらえるのか分からず気持ちだけが空回りした。Community Service があまり盛んではない日本に比べ、シンガポールはあらゆる年代の人が毎週日曜日ボランティア活動に積極的に取り組んでいる。地域社会に貢献する精神を社会全体で育てて、素晴らしいと思った。

Art Masterclasses

Hip Hop Dance, Banghura Dance, Malay Dance, Manga Drawing, Chinese Paper Cutting の4つのクラスから好きなものを選んで行う。Hip Hop は結構ハードでレベルが高かったが、その分楽しかった。Chinese Paper Cutting は、最後には全員が寝てしまうほどつまらなかったらしい。Malay dance はマレーの伝統的な優美なリズムとは裏腹に、なかなか難しいステップで悪戦苦闘。



左上 : Malay Dance, 右上:Banghura Dance
左中央:Chinese Paper Cutting, 右中央 : Manga
左下 : Hip Hop, 右下 : 麻布 3 人の似顔絵
(漫画クラスの Michael が描いてくれた)

Day 7

Teambuilding Activity

この日は、午前も午後も **Teambuilding**、夜は **Cultural Night Preparation** という軽めの日だった。全体的に、前半は政府の機関にお出かけ、後半は体を動かしたり自由行動といった娯楽的な内容になっていたと思う。

さて肝心の **Teambuilding** の内容であるが、午前中は **Zumba** というダンスエクササイズをした。ダンスの動きを取り入れたエクササイズで、巷で話題らしい。インストラクターが **Hwa Chong** の先生でびっくり！ **Hip Hop** とまではいかないが、意外と疲れた。

午後はまず、**Laser Tag** というゲームをした。10人くらいのチームになり、全員にレーザーガンと受信機が渡される。障害物に隠れながら、敵チームを撃っていく、というわけだ。屋外でとても暑かったが、王様ゲームの王様になったりとなかなか楽しかった。実際の戦争では一発の銃弾で人が死ぬのかと思うと、戦争の恐ろしさを学べるよいゲームである。

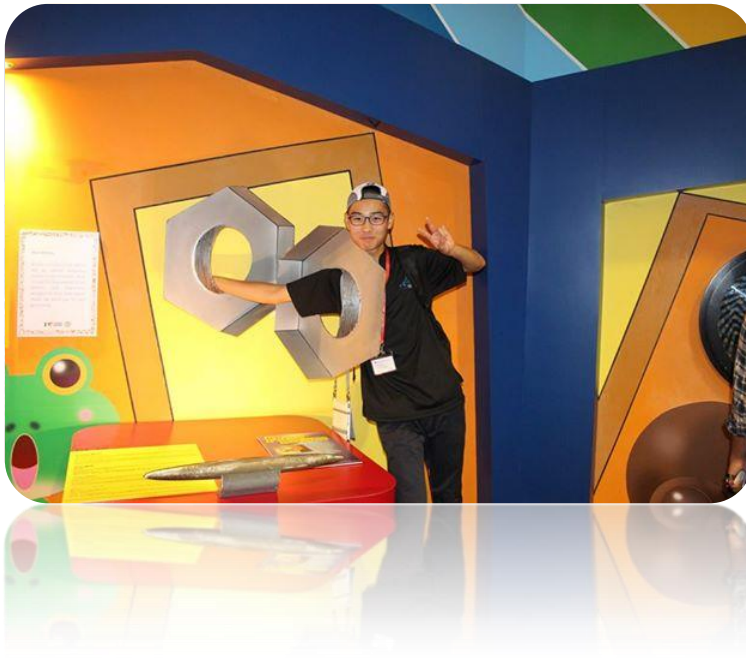
次に冷房の効いた体育館で **Bloop Soccer** をした。写真を見ていただければ一目瞭然だが、大きい浮き輪のようなものに入り(正確には背負って)サッカーをしたりする。最初はぶつかって倒れるのが楽しくて遊んでいたが、途中から中が暑くなったりして疲れてくる。(しかも浮き輪？が途中からかなり臭くなってくる...)



Day 8

Science Centre

トリックアート美術館と科学技術館を組み合わせたような所。印象的だったのが、津波の仕組みを説明する模型の所に 3.11 の津波の映像があり、見たこともない衝撃的な映像に思わず涙が出てきたこと。日本にいと「別の地域」でのことだが、海外から見ると「日本のこと」としてとらえてしまったのだろう。



A*STAR

科学の研究をする政府の機関で、日本で言うところの理化学研究所のようなところ。STAP 細胞について質問したら「そんなの誰も知らないよ」と答えられたが、別のグループで小保方さんについて質問したら「知らない人はいないよ」と答えられたらしい。自分の科学者としてのキャリアについて講演してくださった方に聞くと、論文を早く発表しなければならないというプレッシャーはかなり大きいらしい。シンガポールでは科学者が論文の発表に追われず、研究を深めることに専念できるシステムを構築中とのこと。施設の説明をしてくれたり、研究施設を少し見せてもらったりしたが、専門用語が分からず、眠くてうつらうつらしてたのを注意されて恥ずかしかったことしか覚えてない。文系に少し辛抱が必要。

Free & Easy

Free & Easy は本当に自由行動で、各自シンガポールの好きなスポットを観光することができた。岩崎さんはサイクリングに出かけ、その他の日本チームはナイトサファリへ出かけた。

Night Safari

シンガポールの観光スポットの中で常に1,2を争う人気スポット。

開演前のショーで人が口から火を吹いた時から高まっていた。が、2時間歩き続け、シカとかコウモリとかへびとかしか見ていない気がする。気のせいかな、いや気のせいではない。(反語)



でもコウモリとか手を伸ばせば届くくらいのところにいたのも気のせいじゃない。とにかく近かった。

フラッシュ禁止なのでカメラ撮影は諦めよう！

なんだかんだ夜10時くらいまでみんなで騒ぎ続け、忘れ難い思い出になった。



←破壊力抜群！！

Day 9

Closing Ceremony

午後 5 時から夜の 11 時までである Closing Ceremony、閉会式は、ホテルの結婚式会場のような大きな部屋を貸し切って盛大に執り行われた。何人かの挨拶が終わったら、いよいよ各国の Cultural Performance が始まる。日本のソーラン節は、厳しい練習の甲斐あって素晴らしいものになった。色紙をつなげて「また会おう See you again」



の横断幕を作ったり、組み体操の「さぼてん」をしながら日の丸を掲げたりすると、皆拍手をして喜んでくれたのでとても嬉しかった。日本以外では、オーストラリアやインドネシアは劇、フランスはフレンチカンカン、南アフリカは長靴をたたいて踊る迫力あるダンス、韓国は K-pop、イギリスはハリーポッターやシャーロック・ホームズに扮した劇、などなど各国とも個性あふれるパフォーマンスであった。先生方も、全員で歌を披露して下さり、これでおしまいかと思いきや、式が終わると会場がナイトクラブのようになり、みんなで歌って踊ってどんちゃん騒ぎだった。泣きながらハグしたり、胴上げしたり、皆で別れを惜しんだ。



←アメリカらしいパフォーマンス！



決めポーズの横断幕



日本 Delegates 集合写真！

ボーディングスクールに帰ってからも夜は長かった。手紙を書き合ったり、**Japanese snack party** をしたり、部屋で話したり...皆9日間で出会った素晴らしい友人と思いに過ごしていた。帰国のためのチェックアウトの時間は各国バラバラで、朝3時や6時に空港へと発っていく仲間をみんなで見送ったりした。

Day 10~

Day10 は 2 日多く残る麻布以外の delegates が帰国する日で、素晴らしい思い出を共に作った友達のほとんどが午前中までにあっけなく帰国した。筑附は夜の便での帰国だったので日本チームは他国の delegates を見送ってから観光に出かけた。オーチャードロード、ブギルストリートを経てマリーナベイサンズまで足をのびした。マリーナベイサンズでは屋上展望台にも登り、絶景を楽しんだ。boarding school に戻ると、残っていた韓国、筑附が帰国する時間が迫っていた。はっきり言うとその時はかなり辛かった。彼らは APYLS で最も近い友達だったし、2 日多く残る麻布、特に僕は寂しさのあまり泣きそうだった。



Day 11,12 の 2 日間で麻布はセントーサ島の海に入ってから、夕方にはラッフルズホテルのカフェでティータイムを楽しむ、予定だった。実際には窪田、四元が風邪でダウン、残ったけんちゃん、村上先生も観光に行くにも行けないという何とも悲しい結末で幕を閉じた。

また、facilitator には相当看護してもらった。(窪田に限っては 15 人くらいの facilitator の前で倒れた。) それからはずっと寝ていたのでも、幸運にもと言っていいのか分からないが、みんなが去った後の孤独感、空虚感を感じることはなかったけれど、けんちゃん、村上先生には本当に申し訳ない。

*もしかしたらマリーナベイサンズの屋上展望台ではあまりの高さに酔ってしまう人や、眠ってしまう人がいるかもしれない。気をつけよう！



寝ってしまった人



酔ってしまった人

APYLS 後

このサミットでできた友達とは今でも Facebook などの SNS で頻繁に連絡をとっている。彼らとの話題は尽きることがなく、社会問題や近況報告、なかでも面白いのが APYLS の後日談だ。自分が知り得なかった他 delegates の APYLS での興味深い経験や、中にはガールズトークも聞くことができることも。女の子の友達もきちんと作っておこう！



荷造り完了？部屋に別れを告げて

Summit Dialogue

Day 2 Mr. Bilahari Kausikan, Ministry of Foreign Affairs

最初の Summit Dialogue では、外務省の方からメディアと外交についてお話を伺った。初めての英語の講演だったこともあり、内容は完全には把握できなかった。Mr. Kausikan は、新しい技術、特にインターネットなどによる情報の流出は、避けようとしても不可能であり、逆にその新しい情報の形態を利用したほうがよいと話していた。例えば、ある国で Twitter などの SNS が規制されている事に関して、「それは一時的な解決策でしかない」と言っていた。

私はこの最初の Summit Dialogue で最初の質問をした。外務省の方だったので「日中関係はどのようにして解決したらいいですか」と聞いた。質問に対し、Mr. Kausikan は「問題は "solve" することはできないが、"manage" することならできる」と答えていた。実際問題、国同士の関係になると完全には問題を解決することは不可能なのであろうと感じた。



←みんなの前まで行って質問。

Day 3 Mr. Neo Kian Hong

2つ目の Summit Dialogue は Mr. Neo Kian Hong による教育制度の講演だった。シンガポールでは早い段階から成績別に学校やクラスが振り分けられる、過激な競争社会となっている。

シンガポール政府は独裁であることもあり、教育にとっても力を入れている。教師を訓練する専門的な機関も存在する。また、制度自体も充実していて、日本でいう小学校を修了した後に中学校で4年間学んだ後、試験を受けて成績がよければ Junior College に2年間進学することができる。その後は大学に進むことが可能だ。しかしながら、シンガポールで

は 18 歳の男子に 2 年間の兵役が課せられるため、実際に男子が大学に入学するのは早くて 20 歳のときである。

シンガポール教育の最大の特徴は、学習内容が他の国に比べて早く教えられることである。日本と比べても 1 年ほど早い。そのため、大学に進学する学生は、海外の大学ではなくシンガポールの大学を第一志望にする人が多い傾向にある。地理的に小さい国であるシンガポールだからこそ、教育のような将来的に能力のある人材を育成することに力を入れているのかもしれない。



↑ pigeonhole を用いての質問。

Day 4 Mr. Warren Fernandez about 広報機関

3 つ目の Summit Dialogue は、シンガポールで主要な新聞 The Strait Times の筆者である Mr. Fernandez にシンガポールの広報システムについてお話を伺った。シンガポールは多民族国家であるので、人種差別的な言動はすべて法律によって統制されている。そのため、新聞の情報も一旦政府の機関を通してから国民に伝えられる。大規模の新聞社の数は 2 つ、テレビ局の数は 1 つである。このように制限が厳しい中、Mr. Fernandez は「話を過大に広げないようにしている」と話していた。また、言動統制がされている中で国民の意見をすべて伝えることは難しいとも言っていた。実際、制度で人種的な問題を解決しようとしているシンガポール政府に不満を持つ国民もそう少なくないのである。

4 つ目の Summit Dialogue が Day 8 の朝に行われるはずであったが、後援者側の事情のため取り消しとなった。話を聞けないのは残念であったが、その分だけ遅くまで寝ていることができたのでプラマイゼロである（と考えると良いのだろうか）

Student Dialogue

Delegates が国際問題について話し合う APYLS のなかでもっともサミットらしいセッションだ。各国が事前に割り振られたテーマについて 10 分間のプレゼンテーションをし、そのあと 15 人程度のグループに分かれてディスカッションをする。ディスカッションでは、問題に対する各国の既存の政策を紹介しあったり、自分のアイデアを出しながら、グループとして解決策を導くことを目標とする。Student Dialogue はサミット中 4 回ある。それぞれを詳しく見ていこう。(ディスカッションの内容は筆者がいたグループのもので、他のグループは全く違う展開になっている)



Session1 テーマ : Upholding Individual Liberties

UK<Privacy Rights in a Technological Age>

主張は①時代に合わせて法を改正していくこと②独立した監査機関を設けること③人々の意識 awareness を高めていくことが個人情報の保護には必要ということだった。ディスカッションでは、facebook などのソーシャルメディアもある意味個人情報の垂れ流しだということで、行政が管理するのは限界がある。だから、人々に情報教育を徹底するほうが効率的という結論になった。

France<Consumer Protection>

消費者は様々な観点から保護されるべきとして、消費者情報の管理の徹底、情報を提供される権利の保障などを説明していた。フランスでは消費者のガイドになる月刊雑誌も出版されているそう。ちょうど日本でも食の安全や消費者の個人情報流出事件などがあつた頃なのでとても参考になった。

Malaysia<Censorship & Individual Freedoms>

このプレゼンはとても興味深かった。日本では戦争の経験から検閲は危険だと考えられがちだが、マレーシアでは検閲は社会の秩序を守るために普通に行われていて、彼らの主張は、表現の自由と検閲のバランスを上手くとるべきというものだった。ディスカッションでは中国の delegates が政府による徹底した情報統制の危険性について話していて、かなり説得力があつた。検閲する政府を監視する機関が絶対に必要だという意見でまとまった。

Session2 テーマ : Enhancing Communal Initiatives

South Korea < Promoting Gender Equality >

韓国は男女格差がかなり激しいらしく、136ヶ国中 111位だそうだ。(でも韓国の Delegates は全員女の子だったので、近い将来、女性の地位向上は確実だと思うが...) 女性により安定した職を与えることや保育園などの増設、会社に男女平等のポリシーを根付かせること、収入格差を禁止する法律の制定などを解決案に挙げていた。印象的だったのは、男女格差是正を訴える数々のユニークなポスター。韓国にはそういうポスターが溢れているらしい。

Singapore < Inclusion of the Disabled >

障害者に優しい施設の手本として、日本の車椅子の人でも使える公共トイレを挙げていた。また、障害のある方が就職する機会を広げる例として、JEED という福祉団体と協力して障害者を雇っている UNIQLO が登場した。日本もまだまだ課題が残っているが、わりと inclusion が進んでいる方なのだと分かった。ディスカッションでは、特別支援学校の訪問などを通して、障害のある方が何が出来て何が出来ないのか知るところから始めなくてはいけないという意見が多かった。私自身まだ理解が浅いと感じた。

Japan < Managing an Aging Population >

世界も 100 年後には、現在の日本の時計塔型の人口ピラミッドになるという。だから私達は「高齢化は止められないし、それ自体が問題ではない。高齢化に対応した社会づくりが課題なのだ」というコンセプトで議論を展開した。日本では高齢化によって社会保障制度の崩壊が予想され、“年金を払っても自分はもらえないのではないか”などの不信感が労働者世代に広がっている。お年寄りは“支えなくてはいけない重荷”になり、世代間対立も深まっている。そんな固定観念を変えるための 2つの理念が”Dependent to Independent” と”Power of Community”。



Dependent to Independent

実は今日、高齢者の 70%が定年後も働きたいと考えていることから、シルバー人材センターを使ってお年寄りの能力を社会に活かすべきである。お年寄りを家に閉じ込めずに金銭的にも精神的にも自立(independent)した生活を送ってもらおうようにするのである。

Power of Community

若者と高齢者の世代間対立をなくすためには地域での人の交流が必須である。お年寄り自身に地域社会の運営の担い手になってもらう。川崎市民アカデミーに代表される小規模な大学のような学習施設を増設。高齢者を中心に市民で運営する。人々の生涯を通じた学習を促進する。また、韓国には、敬老堂という地域の高齢者同士のつながりを強めるための歌やダンスのプログラムを備えた公民館がある。見習うべき例として提示した。

世界で最も高齢化が進んでいる国として、実際に日本で行われて成功しているシルバー人材センターや市民アカデミーを紹介した。これから高齢化に直面することになる各国の delegates に問題意識といくつかの解決策を知ってもらえたと思う。

The Philippines <Mitigating the Impact of Natural Disaster >

フィリピンはちょうどこのサミット中にも大型の台風による被害が報じられていた。災害大国であるにも関わらず、災害教育や政府の対応などにかなり課題が残っているようだ。災害教育を徹底して備え、募金や資材を寄付するプロジェクトを活発化させるべきと主張していた。フィリピンは日本とかなり似た境遇にあり、なんと国内初の原発が火山のホットラインの上につくられていたことが最近発覚したそう。協力できる面がたくさんあると感じた。

Session3 テーマ : Strengthening National Fabrics

United States of America < Accessibility to Healthcare >

スウェーデンなどの国が「ゆりかごから墓場まで」面倒を見る型の **healthcare** とアメリカのように個人で保険会社と契約する型を比較していた。ディスカッションでは、一定レベルまでは国が保障し、それ以上のケアは個人が保険を選択して契約するのが良いという意見でまとまった。注目のオバマケアに質問が集中。アメリカの **delegates** によるとあれは完全に失敗だったらしい。

Oman < Education >

オマーンの主張で最も印象的だったのは、先生の教育プログラムの充実だ。日本では先生のレベルが生徒の学びに支障をきたすということは稀だが、発展途上国ではよくあるようだ。また、労働市場の需要に見合った人材を育成するべきとも主張していた。日本の裾野の広い、かつハイレベルな教育は貴重だと感じた。

South Africa < Labor Right >

スライドは超簡潔、でも口頭でしゃべりまくる南アフリカのプレゼンはきつかった～
主な主張の一つが **minimum wage** (最低賃金) をあげること。労働水準も相乗的に上がるからだろう...はい、正直ほぼ分かりませんでした。

Australia < Immigration and Integration >

オーストラリアは現在では 4 人に 1 人が移民という多文化社会。白豪主義もなくなり、かなり移民にとっては住みやすい国だと思ったが、実は生活費がバカ高いそうで、ヨーロッパからの移民は減って、アジアからの職を求めての移民が多いそう。移民の引き起こす問題は、海岸地域の急速な開発で環境破壊が起こっていること。失業率が高くて移民を受け入れられない日本とは全く違う悩みを抱えている。

Session4 テーマ : Building International Solidarity

Indonesia <Poverty Reduction>

Education, Finance, Health, Community, International Aid, Facility など様々な視点からの貧困解決を提案していた。政府の国家予算の使い方が不透明で、貧富の差をなくす政策があまり行われていないのが現実だそう。国際社会としては、限られた短期のスパンではなく、長期的に、発展途上国が独立していける支援をする必要がある。

China <Industrializing amidst Climate Change>

中国の主張は、中国は出来る限りの努力をしているから、技術支援をするなど見守ってほしいということだった。ディスカッションでは CO2 削減目標を達成出来なかった国に制裁を加えるかどうかについてや、炭素税について話し合い、かなり具体的な議論ができた。

India <Nuclear Non-Proliferation>

五大国や NPT (Nonproliferation Treaty) がうやむやにしている部分などを指摘していた。拡散防止には、核兵器を原子力発電に平和利用する方法もあるそうだ。ディスカッションでは、こういった武器に関する国際的な結束をつくるのが本当に大変なのだと実感した。不信感を払拭し、武装解除を進めるにはどうしたらよいか、結論は到底出なかった。

*Student Dialogue 全体を通して

ディスカッションでまず驚いたのは、各国の delegates が主張の補強に、とても適切な実例をあげることに。よくこんなにもびったりでタイムリーな例が思いつくなど感心した。みな主張に説得力があった。一回目にそれを思い知ったので、二回目からは、日本チームで勉強会をして議題についての知識を共有し、自分なりの解決策を考えてから臨むようにした。すると、プレゼンの理解が深まるし、解決策を提示してディスカッションにも貢献できた。吉沢君やはまりんの豊富な知識に助けられ、日本 delegates は皆しっかり準備していたと思う。来年も各自で議題について調べ、勉強会をするとういと思う。(なるべく日本で終わらせよう！)



Outstanding Floor Speaker Award を受賞した由地さん。

おめでとう！

日本チーム プレゼン スクリプト

Hello. We are delegates from Japan.

To start, please take a look at this graph, population of the elderly of different countries. The red dots represent Japan's elderly population. As you can see, Japan is said to be the most rapidly ageing society.

So this is why we're here. We are going to tell you how to manage an ageing population.

First off, I'd like to show you the population pyramids of Japan. In 1950, the pyramid was actually pyramid shaped. In 2000, the shape of it is called an "urn", which is a kind of pot with narrow bottom. And in a hundred years, it is estimated that the graph will look like a clock tower. It is completely different from the ones in the past, so the clock tower model will surely cause some problems.

Maybe you think this is just for Japan. Then, what about the world? ↑ Let's see the world version of these.

In 1950, the graph was a fine pyramid. In 2000, it still looks like a pyramid, though it has slimmer bottom.

And by 2100, ↓ / guess what? The population pyramid is going to be a clock tower, just like Japan!

What these mean, is that in the near future, the world will be just like Japan. / What's going to happen if we don't work on it?

Here are some concerns and problems in an ageing society. The important point is that the problems are causing a negative cycle. First, because of the increase in the number of the elderly, social expenditure increases. Then, the young are forced to pay more taxes and national debt increases too. This leads to the anxiety of the young toward the national social security system and they start to stop paying pension. Because of that, national debt goes up again and its gets worse and worse. / Then what is accelerating this negative cycle?

Now, in many societies there is a prejudice that the elderly are socially vulnerable and they need to be supported. / On the other hand, the young know that they're paying more taxes for the elderly and get less money for their own livings. So the prejudice is causing intergenerational conflicts. / For instance, the young tend to communicate less and lose respect to the elderly.

But is ageing really a problem? Well, we don't think so. It is not too much to say that ageing is one of the steps that all society must go through. The real problem is the stereotype that the elderly are socially

vulnerable and dependent to the working-age population.

To improve this situation, today we brought here two principles.

First, “Dependent to Independent.” As I said in the last slide, the prejudice toward the elderly is the issue that’s causing the negative cycle. In fact, however, 70 % of the retired people are still eager to engage in social activities, even though they don’t have to work anymore. / So the stereotype is wrong. / Then, why not help them find more opportunities and become more independent? ↑

Second, “Power of a Community.” Communities have different powers from the government. They are much closer to people, and are generally managed by themselves. Therefore, with communal activities everyone gets exactly what they need. The power of a community is indispensable.

Now, let us show you two examples of communal activities in Japan that are thought to be quite successful; one on labor and the other on lifelong learning. ☺

First example is Aged Talent Center. It is a public corporation run by the elderly themselves. There the retired people who still want to work can get various one-day job opportunities, such as gardening, housework, child care, handing down traditional ornaments and so on. The elderly work sincerely and do great jobs utilizing their experiences. In fact, more than seven hundred and forty thousands of people are members of this center. Working can get the elderly to feel needed and recognize themselves as a member of the community even at their advanced age. There they find a reason for living. They also become more independent financially and mentally.

Next, I’ll explain about communal activities on lifelong learning. I chose Kawasaki Citizens’ Academy as the example. Actually I live in Kawasaki city and I’ve got to have an interview with one of the managers. Kawasaki Citizens’ Academy is an institution where grown-ups can take a lesson by paying tuition fees. There are many, many special characteristics about this academy. First of all, when you get older, there are fewer opportunities to learn as a student. So this place offers a great chance for the elderly and in fact, the average age of the students is 65. Other fascinating point is that it works just like a university. It means you’ll get the scores at the end of each semester. Also, provided courses are taught by many famous university professors and are very specialized. Moreover, the academy is totally managed by Kawasaki citizens.

So, this institution offers great services for the elderly to get involved in. It helps them become more independent and become part of a community.

Now, let’s take a look at one of the communal activities around the world; Kyongrodang in South Korea.

Kyongrodang was launched around 1980s as a project to build up one public hall per 160 homes. It aimed to provide the elderly of the lower classes with places to get together and have more communication with community members. At first, though public halls had been built up, there were **no specific programs nor activities** provided at Kyongrodang. So people just enjoyed **gambling** there, which caused **bad** impression toward Kyongrodang. To change this situation, in 2000s, revitalization program was carried out. Now there the elderly enjoy the program of sports, singing, dancing, learning computers and so on. For each program, each community chooses one leader among the elderly. And the leaders have regular meetings to exchange information and improve their programs, which are called **Leader Training Programs**. Many of the elderly engage in the programs as leaders, / so Kyongrodang is **actually** managed by the elderly themselves.

Till here we talked about many approaches for managing an ageing society, and here is a brief summary.

Our first principle was “**Dependent to Independent**.” By supporting the elderly get involved in more social activities and become independent, they will **not only feel needed** / **but also benefit the whole society**.

The second one, “**Power of a Community**.” Communities play a substantial role in bringing people together. So it can relieve **intergenerational conflicts**. Also, the engagement of the elderly in communal activities will lead them become independent too.

Last but not least, here is our message.

So far we showed you how to manage an ageing population, but we don't want you to imitate this whole presentation. Those were **just** some examples. So, ↑ consider your nation's characteristics and think and have your **own** solution for the ageing society.

Chapter III

Feedback

麻布高校

窪田直希

Day0～9の10日間で行われるAsia Pacific Young Leaders Summitを一言で表すと...最高だ!と今まで参加された数々の先輩方はおっしゃってきた。結論から言うと本当にその通りだった。他のどんな高校生が、世界14カ国から集まった80人のdelegatesから各国の意見を聞き、意見を交換するなんて機会を経験しているだろう。高校生に限らず、生涯でこんな経験をできる人は少ないだろう。サミットが終わった後になってさらにAPYLSが本当に貴重な体験だと強く確信している。これから拙文ではあるが、僕の感想を残したい。

1.APYLSまで

去年の11月頃、高2の学年旅行委員になった僕は既に廃案となったシンガポールコース委員を務めていた。ちなみにシンガポールコースの委員長は今回の麻布代表の1人、四元。当時、対立していた台湾コースの委員長がもう1人の代表、けんちゃんだ。少なくとも僕と四元はシンガポールコースが廃案になったちょうどその時にAPYLSの存在を知った。それから僕は四元と少しずつAPYLSについて調べ、英会話の練習をした。はっきり言うと当初は帰国子女でもない僕がこのようなサミットに参加できるとは到底思えなかったが、過去にAPYLSに参加された先輩方の文集を読んだり、先輩から直接体験談を聞かせていただくにつれて参加を諦めることはできなくなっていく。幸運にも校内選考を四元、けんちゃんと共に受かった時には本当に嬉しかったことを覚えている。校内選考合格までの道のりは僕にとって忘れ難いものだ。

4月の下旬に初めて筑附の3人に会った。初めて会ったその時からすでに彼らは3人共個性溢れる素敵な方々だったと思う。今年は基本的に皆で集まって意見をまとめていたのでプレゼンの話し合いがなかなか思うように進まなかったこともあったが、僕には到底それが無駄なことだったとは思えない。6人それぞれが意見を持ち、発信していてとても有意義だったと思う。プレゼンだけでなく、performanceやexhibitionに関しても皆の意見を集めて少しずつ準備を進めた。

後のAPYLSに参加する後輩達には代表に選出されてから、APYLSが始まるまでの4ヶ月間を本当に大切にしたい。というのも4月から7月までの4ヶ月間にどれだけ準備するかでAPYLSの価値が決まるといっていいからだ。英会話能力の向上はもちろんで、これは4月までにも取り組んでほしい。ここで強調したいのは、社会系知識の予習も忘れないでほしいということだ。具体的には事前(だいたい5月上旬)に発表される各国のプレゼンテーマに沿って、議論されるであろう問題やそのテーマに対する日本の状況を重点的に予習して欲しい。日本人は、主にStudent Dialogueに関してだが、英語力は最下位、その上意見を言うことに消極的だといわれる(今回の日本チームに関してはあまり感じな

かったが)。しかしこの **Student Dialogue** は **APYLS** の一番の魅力だ。 **Student Dialogue** でなんとしても議論に参加し、生の各国の意見を得て欲しいと思う。繰り返しにはなるが準備次第で **APYLS** の価値は相当左右される。もちろん僕たちに相談してもらえればできる限りサポートしたいと思っているので、是非しっかり準備して臨んでもらいたい。

2.APYLS を通して

僕が **APYLS** で印象的だったいくつかの思い出を紹介しようと思う。

まず、**APYLS** 序盤は周りの **delegates** が次々に仲良くなっている中で、友達を作ること苦勞した。はっきり言って辛かった。しかし思い切って話しかけてみると、集まっている **delegates** は基本的に友好的なので、すぐに親しくなることができた。特に1日目の **city heritage tour** の自由時間でアメリカの **Terrie** と韓国の **delegates** のグループに突っ込んでいったことや、2日目の **Mediacorp** でシンガポールの **Selina**、オーストラリアの **Vigi** と一緒に **Fashion show** のジャッジを務めたことは忘れられない。彼らとは最終的に最も仲良くなれたし、韓国の **delegates** においては国ぐるみで仲良くなり、移動中のバスの中でも近くに座っていた韓国代表と拉致問題について話し始めると、中国、シンガポールもそれに加わり移動中に日・韓・中・新の小サミットが開かれ、白熱していた。

2つめは僕がたまたまどこへ行くのも同じグループだった **Selina** と歩きながら話していた時のことだ。彼女のお婆さんは南京虐殺を経験した方で、日本の恐ろしさをお婆さんからよく聞かされるそうだ。彼女はそれでもアニメなど日本文化が好きだと言ってくれたが、日本史を教科書で学んでいる時には感じたことのない衝撃を味わった。

日本のプレゼンがあった2回目の **student dialogue** の後のグループディスカッションではもちろん僕へ質問が飛んできた。僕はその時その質問に答えきれなかったので、質問してきたマレーシアの **Zane** に、そこから **boarding school** までの帰り道 (**Hwa chong** の校内は広いので移動時間は意外と長い) の間ずっと説明を続け、ついには **boarding school** に帰ってからでも討論を続けた。せっかく質問をしてくれたのだし、なんといっても **Zane** に不満が残ってほしくなかった。 **APYLS** は本当に貴重な時間なのだから、互いに納得するまでしつこくても話し続ければ素晴らしいものを得られる。それは、討論を続けた後に残る達成感、満足感であったり、友情であったり。いろいろな形ではあるが、確かに **APYLS** に参加した証拠として貴重なものだ。

このように **APYLS** に集まった **delegate**、**facilitator** は本当に素晴らしい人達で、積極的に話しかけてくれたり、例え英語につまっても忍耐強く聞いてくれた。特に **facilitator** には本当にお世話になった。 **facilitator** とは、**APYLS** 開催校であるホワチョンの高校生達で、彼らは文化や宗教の異なる 80 人の **delegates** とその引率の先生方を始めに空港で会い、そして帰るまで 10 日間ずっとサポートしてくれる。ある **facilitator** に睡眠時間を聞くと 3 時間寝たと笑顔で返答された時には驚いたものだ。集まった 80 人の **delegates** と **facilitator** は確かに **Young Leaders** であったし、将来この世界を担う **Leaders** になっていくに違いない。

僕は先程この APYLS を最高といったが、それはもちろん楽しい思い出ばかりがあることを意味するのではなく、つらい思い出もかなり多い。例えば、就寝時間はプレゼンの練習、**Student Dialogue** の予習などで深夜 1 時を回ることなど普通であったし、言葉がスムーズに出てこないもどかしさも相当味わった。特にプレゼンに関しては麻布の到着が早かったという理由で国ごとのプレゼンとは別に、日本の交通についてのプレゼンを APYLS が始まってから作るようになった。最終的にこのプレゼンの作成は非常に有益なものになったのだが、最初は焦ったものだった。

3.最後に

来年以降 APYLS に参加する後輩達にメッセージと、僕が APYLS に参加するうえでお世話になった方がたくさんいらっしゃるので感謝の言葉を残したい。

まず後輩へ 4 つのメッセージ。

はじめに準備は本当にしっかりしてほしい。これは先に書いたのでそこを読んでほしい。

2 つめに APYLS では常に一番を目指して欲しい。APYLS では優秀なプレゼンをした国に **Outstanding Presentation Award**、優秀な意見を発信した人物に **Outstanding Floor Speaker Award** と呼ばれる賞が贈られる。今年は筑附の由地さんが **Outstanding Floor Speaker Award** を受賞したものの、日本チームが最も力を入れてきたプレゼンでは残念ながら賞を受賞することはできなかった。しかし、これは賞があるプレゼンだけでなく、**exhibition**、**performance** でも同じように言えることだ。APYLS に参加する以上、日本の存在感を存分に示して欲しい。なぜなら誰がなんと言おうと APYLS に日本から参加する高校生は皆"日本代表"なのだから。その点、今年の日本チームはプレゼンだけでなく、**exhibition, performance** ともかなりレベルが高かったと思う。

3 つめに国際交流についてだ。きっとこれは麻布にだけ言えることだが、麻布では素晴らしい環境が整えられているにも関わらず、国際交流の認知度が低いと思う。僕自身もたった 1 年前に国際交流への参加を始めた身ではあるが、僅かでも英会話や日本人以外との親交の深め方は確実に今の僕を支えてくれているし、APYLS でもそれらのスキルは発揮できたと思う。是非麻布の国際交流を経験してほしい。

最後に単純ではあるが、とにかく APYLS を楽しんでもらいたい。ここまで準備についてや一番を目指せなどとかたい事を並べたが、APYLS では最高の仲間、最高の企画が待っていて、たった 10 日間であるのにも関わらず、必ず最高の思い出になる。国籍や肌の色の違いなど気にせず自ら積極的に声をかけ、多くの **delegates** と友達になってほしい。実際、ここで出会った世界中からの仲間との思い出は僕のこれからの糧になっていくことだと思う。

最後に感謝の言葉を。

四元とは今年の 11 月から一緒に APYLS を目指し、相当支えてもらった。一緒に過ごしたこの 8 ヶ月は絶対に忘れないと思う。彼にはいくら感謝しても足りないくらいだ。けんちゃんも知識も知恵も富んだ人で彼の講義なしでは **Student Dialogue** に全く参加できなかった。

っただろう。ちなみに APYLS 中のけんちゃんはいつにも増して面白かった。由地さんはきっと 6 人の中で誰よりも APYLS が好きだったと思う。本当にしっかりしていていつも脱線する僕達の軌道をもどしてくれていた。岩崎さんは英語はもちろん、プレゼンのパワポやソーラン節などお世話になった節が多すぎる。頼りになります。ハマりんは社会系知識も豊富だけどなんとといっても彼のキャラクターは世界でも通用していて、日本チームのムードメーカーだった。今年の日本チーム 6 人は皆積極的に動いていて本当にいいチームだったと思う。

また、Hwa chong の facilitator には全員にお世話になった。中でも麻布担当の Yong Hong、筑附担当の Kenneth、さらに僕が倒れた時に看病してくれた（もっとも僕は文字通り倒れていたの、看病してくれた facilitator を全員把握できているわけではないのだが、）Jiong Wei、Shi Mian には特に感謝したい。

引率したださった村上先生は後世のために動画や写真など記録をつけられていたり、オセロの普及に尽力されていた。きっと今回の各校からの引率教員の中では一番 delegates に知られている先生だと思う。APYLS までの手続きも含め本当にありがとうございました。また、応援して下さった先代の代表である岩田さん、文さん、古川さん。さらに戸田さん、北瀉先生、杉浦先生、滝田先生、戸叶先生、鳥越先生、そして両親。振り返るとたくさんの方に支えていただいた APYLS でした。本当にありがとうございました。



“C3 forever!!”

左から僕、シンガポールの Selina、マレーシアの Zane。
彼らとはどこに行くにも一緒に最高の仲間だった！

吉沢健太郎

0.はじめに

真夏の夢のような感覚であった、というのが今のところ最もしっくりくる表現に思える。9日間という時間が駆け抜けていくのはあまりにも早すぎた。そして密度が濃すぎた。このとても濃厚な思い出を感想にまとめるのは本当に難しい。だから、まとまりのない文章で読みづらかったらごめんなさい。

1.選考まで

僕が APYLS について初めて考えたのは一年前の夏だった。国際政治・経済に関心があり討論部でも議論することが多かった僕は、模擬国連大会に応募した。高校 1 年で英語力も皆無である僕は見事に瓦解した。大会に行けなかった僕に「APYLS が来年あるぞ」と選考担当の先生がおっしゃってくださったが、僕にとって APYLS など雲の上の雲のような存在だった。そうして時は過ぎていったのである。

今年の春、APYLS 選考のお知らせを手にしたときも同じ気持ちだった。応募するか躊躇する僕の背中を押して下さったのは副担任であった鳥越先生であった。そして運よく合格することができたのである。共に合格したのは、四元・窪田という気心の知れた親友であったことに心底安心したのを覚えている。

2.準備

顔合わせ前に先輩方にお話を伺うことは重要でしょう。

Performance は現地でも準備の時間があるということで、プレゼン作成と Exhibition 準備を優先して進めた。

プレゼン作成は事前にどれだけ会えるかが重要。麻布と筑附は定期試験や文化祭が絶妙な形でバッティングし、会う回数が少なかった。プレゼン担当と Exhibition 担当という風に学校で役割分担してしまった方が楽かもしれない。

Exhibition 準備では浅草に買い出しに行ったりした。2校共同の買い出しは、顔合わせをしてまもなくやった方がいい。お互い仲良くなって打ち解けあうことができる。先輩から引き継ぎ資料があるかもしれない。

3.APYLS へいってみると

APYLS の魅力はたくさんある。いくつかにわけて書く。

①見学

APYLS の凄味は、政府庁舎やテレビ局といったような、日本にいたとしても訪れないようなところを見学することができる点である。資源に乏しいシンガポールがいかにか今日の経済大国になりえたのか、という僕の疑問を解決するには十分すぎるものだった。

特に、外務省で実際に閣僚のお話を伺えたのは感動的だった。まさか日本の外務省より先にシンガポール外務省に行くとは。そしてやはり 69 年という月日が流れても日本への一定の警戒感というはあるのだな、と改めて感じた。「アジアの中の日本」という意識を持つ必要があるのではないか。

一連の見学を通じて感じたのはシンガポールではエリートの存在感が大きいことである。思うに、シンガポールの発展を支えてきたのは、エリートが計画を立案し強力な政治体制（まさに GIC での話に出てきた「リーダーシップ」）の下に推し進め、そこで得られた利益を全国民に還元し、体制への支持を確実にするという構図である。シンガポールが世界で生き残るための道なのだろう。

②Dialog

Student dialog をはじめとする議論。背景知識が必要であることは言うまでもないが、それ以上に意見を言う積極性が必要なのだ。落ち着いて話せば彼らだって聞いてくれる。世界 20 カ国を超える国から集まった学生と議論できるチャンスなんて貴重だ。そうやって主張したのちに、日本についての質問が来ると嬉しかったし、議論終了後個人的に談義するのは楽しかった。恐れる必要はないのである。

日本のプレゼンはあの中では良かったと思うのだが……残念。やはりスピードの問題だろうか。他国の発話速度はとても速く聞き取るのは至難の業だった。だが、そこまでに至る過程は僕らに自信を与えてくれるものだと思う。

麻布の 3 人にはさらに LTA（国交省みたいなもの）でのプレゼンを担当することになったが、自分の趣味の「交通」だった（オタクではないよ）ので苦ではなかった。むしろ、日本の交通を知ってもらうことのできる好機だと思った。**Yong Hong** にはお世話になった。

Summit dialog は聞き取りに苦労した。講演の笑どころで笑えないほどつらいことはなかった。スライドなどを頼りに乗り切った。教育についての講演は日本の教育問題を考えるうえで非常に参考になるものだった。

Dialog 以外でも話し合った。バスの車内でたまたま行った「東アジアサミット」では歴史問題や南シナ海問題、北朝鮮問題について日中韓新 4 カ国で議論できたのはこの上なくうれしかった。政府間の対立はあれ、こういった人と人との交流をしていくことで相互理解が深まっていくのではないか。交流の醍醐味のように感じた。このほかにも個人的に議論することがあったが、どれも僕の好奇心を満足させてくれた。

③Exhibition and Performance

Exhibition や **Performance** は互いの文化理解が目的だと思うのだけど、とても楽しかった。日本人の味には正直言ってなじめない食品もあった（英仏のクッキーはうまかった…）。ドリアンキャンディーはトラウマである。どの国の展示も非常にこってっていて、その国では受け入れられているのだと思うと、異文化尊重の重要性というか自文化中心主義からの脱

却が必要だと思った。

日本の展示は盛況で、書道サービスがとても人気だった。八つ橋が人気だったのには驚いた。やはり、小豆は不人気だった…。国旗だとか富士山の写真とかを用意して装飾を派手にすべきだったと思う。2校の学校案内パンフレットを持って行ってもよかったかなと思っっている。

Performance は Closing ceremony の熱気もあってとても盛り上がった。日本のソーラン節は会場の空気を支配していたと思うし、とても盛り上がった（舞台が揺れていて怖かった）。ひとえに、由地さん・岩崎さんに振り付け指導をしてもらったおかげだと思う。

④観光

プログラム中にも観光のようなものはあった。リバークルーズは暑さも忘れる景色のよさであった。マーライオンを川から見るができるとは！ 船上では写真大会だったけど本当に楽しかったし、シンガポールに来たことを実感する最高のひと時だった。

APYLS 終了後も、日本 delegates で観光に出たが、強く印象に残るのは、マリーナベイもさることながら、ブギスである。活気あふれる露店街は東南アジア情緒漂うもので雰囲気も良かったし、ホーカーズでおばさんとなんてことのない会話をすることができたのも楽しかった。日本 delegates はみな楽しい人だから、思い出に残る観光をすることができた。

⑤友人

9 日間ともに時間を共有する中で仲の良い友人もできた。日本語の達者な Henry や英語は聞き取りづらかったけどとても優しくかった Raghavan ,政治談議から好きな芸能人の話まで幅広く話した Selina, 一緒にいることも多かった韓国 delegates やマレーシア delegates, 一緒にバスケットした南アフリカ delegates などなどたくさんの人と出会うことができた。そして、そのほとんどと SNS でつながっていることができている（いい時代になったなあ…）。

四人部屋だったのでルームメイトも多く、くだらない話もしてとても楽しかった（冷房の設定温度で論争になったけど）。

向こうのファシリテーターにも大変お世話になったし、仲良くなることができた。ファシリテーターの中に Hwa Chong の生徒会長がいて国境を越えた「生徒会外交」もできた。

どの参加者も魅力的だった。まさに「看板に偽りなし」で世界をこれから牽引していくリーダーズが集まっているのである。

4.後輩に伝えたいこと

ここからはこれを読んでいる後輩へ。僕の反省も踏まえて書きます。

まず、英語力はとにかく鍛え上げて下さい。特に会話力。一億人も人口がいてそれなりのマーケットがある日本国内にいと英語の必要性はそこまで感じないかもしれないが、英語が話せなければ世界の舞台に立つことすらできないのである。日頃から英語慣れして

おくことが重要である。

二点目として、社会問題、特に国際問題にはアンテナを張って下さい。Student dialog で日本の立場や意見を問われることが多々ありました。そんな時にすぐ切り返せるように知識・主張を持つておくことが重要です。

三点目としてポジティブであってください。「旅の恥はかき捨て」というスローガンで僕は 9 日間過ごしましたが、他者には積極的に、好奇心も積極的に、思考も前向きに（すべてが思い出になります）することがいいと思います。

四点目ですが体力をつけましょう。現地は冷房の設定温度が日本より-5℃が基本です。当然安眠が阻害されるので、上着のようなものを持っていきましょう。また、よく食べてよく水を飲みましょう（暑いのでこまめに水分補給を）。

最後に、この文集を読んだ後輩は APYLS に応募しましょう。こんな機会を逃すなんてもったいないです。

最後に…

日本チーム

日本チームは今振りかえっても幸せなチームだった。メンバーについて振り返っていろいろと思います。

四元は中 1 からの仲で、彼についてはよく知っていたつもりだったけど、改めて英語力やその多彩さに敬服した。窪田のコミュカの高さには脱帽。あんなにハキハキと会話していける姿を見てほれぼれした。そして APYLS への愛情で溢れていました。岩崎さんには感謝してもしきれない。卓越した英語力は言うまでもないけど、パソコンが上手でスライドが見やすかった！さすが理系！怖がりな一面があるのが面白かった。ハマリンとはどれだけ気が合ったことか！彼の知識量は豊富で話があったし、その一方で夜の Preparation でのハイテンションは本当に楽しかった。由地さんの APYLS での発信力の高さは際立っていた。Outstanding Floor Speaker award 受賞も納得できる積極性の持ち主で、心から尊敬せずにはられない。

日本 delegates で今後も定期的に連絡を取って会いたいと思う。将来、delegates はどのような仕事をしているのだろう。ぜひとも、将来一緒に仕事をしたいと思う。

来年の日本 delegates はどんな APYLS を体験するのか。今から土産話が楽しみである。

最後に、麻布の引率をしてくださった村上先生、筑附の福元先生、APYLS に携わったすべての方に心からの感謝を。本当にありがとうございました。

四元 春輝

APYLS は何もかも初めての経験ばかりで、充実した濃密な 10 日間となった。ここにその一部を書き残すことで、APYLS にすでに行った人とは思いを分かち合い、まだ行っていない人には少しでも多くのことを知ってもらえれば幸いである。さて、今回の APYLS を振り返るにあたって、1 準備、2 内容、3 生活、4 英語、5 人々、というように分けて話を進めていこう。

*

1 準備

そもそも僕が APYLS の存在を知ったのは、時をさかのぼって 2013 年 11 月、学年行事のコース選定のさなかだった。あのとき僕は高 2 の学年行事でシンガポールに行きたいと思い、4 つのコースのうちの海外枠 1 つを台湾と争っていた。シンガポールコースの担当の先生が 2012 年の APYLS にも参加した村上先生ということもあり、何度か話し合ううちに何気なく APYLS の話を耳にした。結果、シンガポール案は台湾案に負け、学年行事でシンガポールに行くことは出来なくなったものの、代わりに千載一遇のビッグチャンスを手にしたのだ。

とはいっても APYLS に行きたい人全員が行けるわけではなく、各学校から 3 名という枠があるので、春休みが明けた始業式の日に関内選考会が行われた。英語科や社会科の先生 5 人と一人ずつ英語で行う形式であり、とても緊張した。しかし想定問答をある程度作り、春休みのうちに話す練習をしていたので運良く通過することが出来た。春休みに韓国の養正交流に参加し、少しでも英語を話す努力をしておいたのも良かったと思う。

さて、急いで登録を終わらせ、次なる壁は日本チームで集まって本格的に APYLS の準備を始めることだった。日本チームのメーリスや facebook のグループを作ったり、月に 2 度くらいお互いの学校に出かけて打ち合わせをした。話し合う内容は主に 3 つ。Student Dialog でのプレゼン、Cultural Exhibition の出し物、Cultural Night でのパフォーマンスだ。出し物やパフォーマンスはほぼ例年通りですぐ決まったが、プレゼンの話し合いには相当苦労した。日本のテーマ(毎年 5 月くらいに与えられる)は 3 年連続で”Natural Disaster”だったのだが、今年のテーマは”Managing Aging Population”、高齢社会についてであった。テーマのせいというわけでもないのだが、話し合いは難航し、さらに途中でファシル (facilitator の略。僕たち Delegates のあらゆる面倒を見てくれる)からの意見があったり、10 分に収まらないからと内容を大幅に変えたりして、出発までに完成するのか相当ひやひやした。結局岩崎さんがスライドを全部作ってくれたり英語の原稿を作ってくれたりしたので、プレゼンの出来は世界一(文字通り)だったと思うのだが、それ以外にも Student Dialog などたくさん準備したいことがあったので、やはり麻布の選考はもっと早めにする

べきだと思う。

2 内容

ここでは APYLS の内容について思ったことを、政府機関の研修、Summit Dialog、Student Dialog に分けて書いていこう。

まず政府機関の研修について。最初に感じるのが、その多さである。それもそのはず、シンガポールは建国以来一党独裁を貫いており、政府の力が強い国だと言ってもいいだろう。その政府が APYLS に全面協力しているのだから、たくさんの政府機関に行かせてもらえるというわけなのだ。だからどこに行っても感じたのは、行政施設が立派でハイテクで、「金かかってんなあ、やっぱ政府の権力が大きいんだな」ということだった。シンガポールや中国のような経済発展を続ける国においては、国民が民主主義よりも経済発展を求めるので、効率の良い一党独裁になり、結果として政府の力が強くなるのである。この APYLS も、シンガポールのトップの高校 Hwa Chong Institution が全世界から次世代のリーダーを集めており、政府としてはまさに格好の投資場所なのかな、なんて考えてしまったりもする。どの施設に行っても、いいことか悪いことかは別にして、シンガポールをどこか宣伝しているような印象はぬぐえなかった。

次に Summit Dialog だが、これについては全く予想通りだったと言っていいだろう。一言で言えば、ほとんどわからなかった。たまに単語やフレーズが聞き取れるという程度で、スライドを使って説明してくれればまだわかるのだが、そうでない人も結構いたため、ちんぷんかんぷんなんてことも多々あった。しかし、ただ聞いているだけだと絶対寝てしまうので、何かしら質問をしようと思って聞くと、集中しながら聞けたような気がする。質問も、最初はマイクを渡されて質問するという形式だと思っていたが、実際はそうではなく、前に置いてあるマイクの所に自分で行って、みんなが見ている前で質問するという形式だったのだ。最初は緊張して質問を躊躇していたが、みんなの質問が思ったより少なかった(今年は比較的消極的?)ため質問してみたら、これがなれると逆に注目を浴びる楽しさになってきたのだ。最後の方には名前を Haruki を Hikari に間違えられたこともあったが、笑いに変える余裕を持てるようになったのも積極的にチャレンジし続けた結果だと思う。

最後に、Student Dialog である。これに関しては、最初は予想以上に何も出来なくて本当に焦った。後から考えると当たり前のことではあったのだが、単語は調べなければわからないし、皆早口で何を言ってるのかわかりにくかったし、自分の意見も即興で言えるわけもなくノートに全部書いてからじゃないと言えなかったし、そんな準備を全くせずに望んだ 1 回目は本当に散々だった。欧米系の人たちが口論に熱くなっているのをアジア系が黙ってみているという流れになり、議論を止める勇気もないまま終わってしまった。さすがにこれではやばいと、次回からは、そのテーマに関する情報(歴史、現状、展望)を把握し、基本的な単語を押さえておいた。これだけでだいぶ変わった。単語さえわかれば相手が早口で話していても単語を聞き取って何の話をしているのかくらいはわかるし、本当に聞き

取れなくてもファシルが皆の意見を高速でタイピングしているので、スクリーンの近くの席に座れば(ここ重要。遠いと字が小さくて見えない!)議論の流れはわかるはず。たしかに **Student Dialog** は一番精神的につらい時間だったが、それを乗り越えてこそ **APYLS** をよりいっそう楽しめるのだと思う。

3 生活

ここでは、**APYLS** の期間中僕たちが宿泊していた **Hwa Chong Boarding School** での生活について書いていこう。これも一言で言えば、しんどかった。何がしんどかったのかと言えば、食事とシャワーとエアコンだろうか。

まずは食事について。基本的に食事は全て **Boarding School** にある **Dining Hall** で食べるのだが、この食事が何ともまあ、まずいというわけではないのだがバランスの悪い食事だった。炭水化物が多くて野菜が少ない。こういう食事が平気な人もいるのだろうが(海外ではこれが当たり前なのだろう)、僕の体は最終日になるとサラダを欲していた。出てくる料理は中華系と洋風が半々で、たまにインドっぽい料理や日本っぽい料理(ふにゃふにゃの天ぷらとか?)もある。デザートには南国らしいドラゴンフルーツや、例のリンゴ丸かじりなどの果物がよく出てきた。米はタイ米で、初体験だったため最初は美味しくないと思っていたが、基本的に炒飯であったため、むしろ良く合っていて美味しかった。

次にシャワーについて。ご存じの通りシンガポールに風呂はなく、部屋にあるのはシャワーだけである。これが毎日風呂につかっている身にはなかなかつらかった。初日には温度調節の仕方もわからず、この冷たいシャワーをあと 10 日間浴びるのか、と先が思いやられたものだ。たしかにシャワーだけの生活は 3 日もすれば慣れてくるが、日本に帰ってきからの風呂のありがたみは、失って初めて気づくものだった。

最後にエアコンについてである。例年のごとく、今年もエアコンの犠牲者が多数発生。エアコンが寒すぎて部屋を出て寝るはめになった岩崎さん。エアコンが壊れて翌朝窓が結露するほど冷えてしまったハマリン。ご愁傷様でした。僕の部屋でも、エアコンのせいというわけではないのだが、ルームメイトの **Brian** が根っからのアメリカ人で、上裸で寝るのにエアコンを 22 度に設定したがるという人だった。僕は根っからの日本人で節電温度の 28 度で寝たかったので、話し合いの末、25 度に設定することに決まった。僕は寒くて風邪を引きそうだったので、長袖のパーカーを羽織って寝るはめになった。

ここまで、寮での生活の愚痴をぼとぼとこぼしてきた。どれも仕方がないことが多いのだが、日本という住み慣れた場所をでて、シンガポールという異国の地に暮らすことには、多かれ少なかれ体に負担は出てくるだろう。サミットが終わった次の日、日本チームでマリーナ・ベイ・サンズに上ったのだが、僕は頂上で具合が悪くなり、皆に少々迷惑をかけたしまった。これから行く後輩のみんなは、僕の二の舞にならないように、体調管理に気をつかいながらシンガポールを楽しんでもらいたいものだ。

4 英語

APYLS を楽しむ上で、さらにこれからの世界を生きていく上で、その必要性が日に日に増していく、英語。今回の麻布チームには、いわゆる帰国子女や、それ相応の英語力を持つ者がいなかったの、周りに頼らざるを得ない機会が多かったのではないかと思う。プレゼンの英語も作ってもらったのを丸暗記するだけだったし、普段の会話でも相手に気をつかわせてしまったことも多々あったと思う。英語で困っていたのは日本男子と中国の一部だけで(韓国はインターナショナルスクール!)、フランス人は誇りが高くて英語を嫌う、インドやシンガポールは訛りがきつくてネイティブでも聞き取るのに苦労する、といった噂は、もう昔の話になったしまったのだろう(しかしやっぱりインドやシンガポールは聞き取りにくいこともあった)。

春休みの養正交流で、外国人と仲良くなるのに英語力はそこまで必要ないと知った。たしかにそれはそうだろう。仲良くなるのに必要なのは積極性とコミューカドと思う。それさえあればある程度の所までは仲良くなれるのだが、今回の APYLS では、本当に気の置けない仲になるためには言語の壁も越えなければならないなど痛感させられた。英語を話すことを意識している段階では、そっちに気がとられて本当にリラックスした会話が出来ず、どうしても相手に身構えてしまうのだ。だからこそ、後輩のみんなにはそれ相応の英語力をもって APYLS に臨んでもらいたい。コミュニケーションの手段としての英語は、一朝一夕で身につくものではない。僕自身、普段の学習方法に限界を感じ、本当に使える英語を目指すのにはいいきっかけになった。リスニングは、シャドウイングでもディクテーションでもやって、聞いて理解できるようになること。スピーキングは、文法を気にするよりも、英語をどんだん口に出すこと。これさえ出来るようになっておけば、2日目3日目あたりで英語が出来ない絶望に陥ることなく、楽しく APYLS を満喫できるだろう。

5 人々

APYLS で出会った仲間たちは積極的で、社交的で優しく、優秀で、最高だった。APYLS を通じてたくさんの人々に出会うことが出来たのも大きな魅力の一つで、一生の財産になったと思う。

まずはやはり日本代表のみんなだろう。麻布の 2 人とは中学時代から親しくしていて、吉沢には予算委員や討論部で、窪田にはバスケット部や養正交流などでお世話になってきていた。3 人で行くことが決まってからはもう来る日も来る日も学校で話し合ったし、チームワークはとても良かったのではないだろうか。一方筑附の 3 人は皆本当に優秀で、さすが 40 人から選ばれただけあるな、という感じだった。例年は麻布がプレゼンを作ることが多いと聞いたが、今年はほとんど作ってもらったも同然だったし、英語力でもソーラン節の練習でも頼りない僕らを引っ張ってくれた。岩崎さんの英語力と PC 力はピカイチだったし(ハルキとヒカリがよく間違えられたのも今ではいい思い出)、由地さんが積極的に外国人に話しかけたり、しっかり準備をして Outstanding Speaker 賞を受賞したのには、日本人

の可能性を見せてもらった気がした。もちろんハマリンも、その豊富な知識と卓越したキャラクターでみんなの注目を集めており、つくづくこの 6 人で良かったな、と思わせられたのだった。

もちろん外国の **Delegates** ともたくさん友達になれた。南アフリカの 3 人と到着翌日 (**Day0** の前の日) にバスケをしてから、**HipHop** や **Zumba** でも一緒にはしゃいだ **Guy**。彼は最初からその名前で皆の注目を集めていたのだが、馬の頭をかぶったりし始めたあたりからは本当にブレイクしていたと思う。オセロや **Night Safari** を共に楽しんだ **Evarett** は、リーダーシップ、誰もが先生と間違える風貌、新たなアイデアを思いつき実行する能力を兼ね備えた、正に次世代のリーダーという感じで、最初から最後まで抜群の存在感を放っていた。オーストラリア唯一の白人である **Henry** は、7 週間の短期留学で日本の大阪に来ていたことがあり、僕の英語以上に日本語が上手だった。彼は自らが、そのかわいさから **Fashion Show** など皆の注目を集めていたのに、途中から人のことをかわいいと感じるようになったのは謎である。マレーシアの **Zane** は、初日からおもしろそうだと思っていたが、言動が紳士的だったのには感心させられたし、日本語のひらがなとカタカナの違いを説明したりしたのも懐かしい。あと、ヨンホンをはじめとするファシルたちには、本当にお世話になった。僕が水筒をなくしたり名札を壊したりしたときにも、嫌な顔一つせず新しいのをくれたし、特にヨンホンには、**LTA** でのプレゼンを作るのにパソコンを貸してもらったり、英語の原稿を作るのに夜中の 1 時までつきあわせちゃったりして、本当に助かった。

ここ 5 年間ほとんど同世代の女の子との関わりを断たれていた僕にとっては、たくさん話せただけでもとても楽しかった。考えるに、日本の女の子にはある種の壁を感じてしまうのだが (なぜか筑附の 2 人には全然感じなかったが)、外国の子はすでに言語の壁や文化の壁があって、その他のことを余りにせずに話せるのかもしれない。奇妙に思われるかもしれないが、これも男子校生の妙な性なのだと思理納得してほしい。そんなわけで、女の子とも仲良くなれた。**City/Heritage Tour** で一緒に変なかき氷を食べた **Sylvana** にはその後もかわいがってもらったし (文字通り?)、韓国の子とは国ぐるみで仲良くなれたし、シンガポールの **Selina** とも、彼女の好きなタコの話で盛り上がりながら仲良くできたし、本当にみんなから、書き尽くせないほどの思い出をもらった。全ての思い出に、ありがとうと言いたい。

*

ここまで **APYLS** の思い出を様々な側面から書いてきて何が言いたかったかということ、要するに **APYLS** はとても充実していて楽しかったということだ。しかし、後から振り返り、ここをこうしておけばもっと良かったということがあるのも事実である。最後にそれを少しまとめておきたい。

まずは徹底的に準備していくこと。「準備」の所でも述べたが、APYLS の可能性は無限大。だから、準備次第でいくらでも楽しめる。早いうちから、あらゆる事を想定して、出来るだけの準備を積んでいくことを薦める。

次に、積極的であれ、ということ。引率の村上先生の例を挙げると、彼はオセロの元世界チャンピオンの経験を生かして、Hwa Chong にオセロ盤を 4 台も寄贈し、Dining Hall に置いて食事が終わるといつもオセロをやっていた。オセロはルールもわかりやすいため、結果的にみんなで楽しめてとても良かったと思う。先生はフランス語も堪能であったため、フランス人を見つけては積極的に話しかけており、とても充実していたと思う。

APYLS で日本と違うなと思ったのが、海外では何でもプラス思考だということ。日本がマイナス思考というわけではないが、APYLS はやったらやった分だけ正当に評価してくれる。消極的になって縮こまってしまうのが一番もったいない。どんどん自分の殻を破って行ってほしい。

ここに書いたことはどれも当たり前のことではあるが、それが一番大事だと思う。ここに書いたことは全て、実際に肌で感じたことであるので、APYLS に行く際に参考にしてもらえれば嬉しい限りである。What memories will you make? あなただけの APYLS を、ぜひ作って行ってほしい。

筑波大学附属高校

由地 莉子

私が APYLS を知ったのは中学校 2 年生。以来、交換留学とは違って、国際問題について各国の代表と議論できる APYLS に参加したいと思い続けてきた。ついに念願叶ったこの 9 日間は正直長く感じたときもあった。しかし、終わってみた今、達成感と出会った素晴らしい友、貴重な学びでとても満たされている。APYLS は確実に私を成長させてくれた。

まず、出会った友人たちについて。シンガポールに行く前に自分で決めた目標は「9 日間一瞬たりとも無駄にしない」。せっかくアジア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ世界各国から集まった優秀な同年代と話すチャンスなのだから、自分から積極的に話しかけて各国の政治情勢や文化、また将来の夢についても語り合いたい、世界中にネットワークを作りたいと思っていた。この目標は達成できた。初めの 2 日間くらいは写真を見せ合って文化紹介をすることが多かったが、**student dialogue** や **summit dialogue** を経るうちに、国際問題に関する共通の問題意識が出来てきて、**dialogue** の後にバスの中や食事、寮で解決策を議論するようになった。各国の実際に行っている政策を合わせていくうちに、新しい、素晴らしいと思える案が出てきたりして興奮した。APYLS の **delegates** はみんな社会問題に興味があり、かつ知識が豊富だ。なぜなら純粋に探究心が強いのだ。どんどん質問してきて、知識を増やしていく。二人で話していたら、いつの間にか 3,4 人加わって、ちょっとした **discussion** 兼情報交換会になる。私達 APYLS2014 の **delegates** はアメリカの Everett が作ってくれた **facebook** ページ **one heart one world** でサミットでした議論の続きをしようとして試みている。他国の若者の意見を聞きたいなと思ったときにすぐに投げかけることが出来る友がいるのは素晴らしいと思う。

こんな固いことばかり書いているが、実際一番楽しかったのはいわゆるガールズトークだった。夜な夜なパントリーで、話があっちこっちとびながら学校のことなどについて話したのはいい思い出だ。国は違っても考えていることはほとんど変わらない。むしろ、日本の友達よりも APYLS の友達の方が考え方が似ていることもあった。今でも APYLS と聞いて最初に浮かぶのは、日々の何気ない会話で笑いあった思い出だ。

次に、APYLS での学び。APYLS の最大の魅力の一つは、大臣や企業の **chairman**、新聞の編集長など重要機関のトップの方々と直接お話しできることだ。**Summit dialogue** と機関訪問で大切なのは、質問することとメモを取ることだ。事前にその分野で疑問に思っていることをピックアップしておく、その専門家に答えて頂けるから、かなり貴重な学びになる。また、講演内容をなるべく書き取ってあとでゆっくり見直すと、意味がより深く理解できる。学びがその場で終わらず、帰国後にも残るのでぜひメモを頑張ってほしい。

講演してくださる方々は、皆さん経験豊富で貫録がある。そんなひとに“**You are the future leaders.**”などと言われたらやる気も出る。これは私が先輩から言われたことだが、APYLS 中には、「大切だな」と思うキーフレーズが出てくるはずだから、それをしっかり書き取っておくと、モチベーションになる。

そして、APYLS の間、私が一番感謝したものは何か？日本という国にである。寿司や漫画、アニメに代表される日本文化は超人気である。日本という国に、文化面から興味をもち、日本を好きになったという友人がたくさんいた。日本人というだけでこんなにも話しかけてもらえるなんて、日本はなんてすばらしい国なんだと思った。日本チームによる日本語講習は大盛況だった。きらきら星の日本語バージョンを必死に覚えようとしてくれて嬉しかった。

また、日本の政治、社会の安定にも気づかされた。インドネシアでは権力者が国家予算を横領するなど、政府への不信感も強いし、教育レベルも低いという。日本国内には批判ばかり聞こえてくる日本の政治だが、相対的に見れば悪くないと思う。いくらでも改善していけばいいと思った。

こんな素晴らしい日本を戦後約 70 年で作り上げた先人たちは並々ならぬ努力をしたのだろう。でも今、自分たちがサミットに来てみると、日本人が一番英語が出来ない。私達若い世代はもっと頑張らないと、今の日本を維持し、発展させることは出来ないと感じた。

別れのときにみんなが言っていた言葉があった。“**All the best to your future!**” 同じような夢をもつ仲間として、自分も頑張るから、あなたも頑張って！ということだ。

「将来国際会議で **reunion** しよう」などとビッグなことも言い合った。将来、今度は本当の会議で皆と仕事ができるように日々頑張るのみだ。遠く離れているが、彼らを思い出すと身が引き締まる思いがする。最高に楽しい思い出とこれからも続く友情をつくれたこのサミットは、中二から 3 年間思い描いていたよりもはるかに素晴らしかった。

APYLS 最高！

そして最後に日本チームについて。いつも丁寧に白熱する議論をまとめてくれた吉沢君。日本チームの砦でした(笑)でも、シンガポールでは変なテンションのけんちゃんも見れて嬉しかった！超多才な四元君。あなたの習字はほんとに上手い。ファッションショーでの堂々たるパフォーマンスも尊敬だよ。筑附の最終日連れまわしてごめんね...窪田君、コミュニケーションワン。いつも笑顔で気が利いて、窪田君なしでは日本チームこんなまとまらなかったと思います。はまりん。何気なく初対面だったけど、期待通り、いや、以上に話してて楽しかった。社会系知識と天然さを見事に両立してました。そして、ひかり！朝、パソコン室でプレゼン話し合ったり、飛行機のなかで将来について語り合ったり...いっぱい話したね。プレゼン最高！頑張り屋でとても刺激を受けました。APYLS という素晴らしくも過酷なプログラムと一緒に乗り切った 5 人。本当にありがと

う。そしてこれからもよろしくお願いします！

引率して下さった福元先生。いつも温かく見守って下さってありがとうございました。Closing ceremony での、先生の「全ての人に感謝の気持ちを」という言葉が今も心に残っています。麻布の村上先生。オセロの王者で delegates に大人気でした。フランス語頑張ります！選考や準備にあたってお世話になった鎌倉先生。本当にありがとうございました。

何度も相談や質問に答えて下さって、応援して下さった 2013 APYLS の delegates の先輩方にも感謝しています。先輩方のおかげで万全の準備でサミットに臨めました。

今回 APYLS に参加させて頂くにあたってお世話になったすべての方々に感謝の念でいっぱいです。この学びを必ず次のステップにいかしていきます。ありがとうございました！

岩崎光里

Come into my life, APYLS.

筑附での APYLS 準備は選考会から始まった。高 1 の 12 月のことである。筑附を受験したそもそもの理由の一つが「留学制度があるから」であった私であるが、高校に入ってから全く海外に目も向けなかった。どうしてだろうか。なにがおこったのだろうか。APYLS が "came into my life". いや、本当に自分に何がおこったのかはまったく覚えていない。ただ、APYLS が私を呼び寄せただけなのである。

選考

選考内容を見ると、「英語でのスピーチ・ディスカッション、筑波大学の教授との面接、内申など」と書いてあった。「やってみるか」ぐらいにしか思っていなかった。しかし一方で、「もしかしたらいけるのではないか」とも思っていた。そして、いざ説明会に参加する。啞然とした。APYLS の他に韓国で行われる IAS の選考もかねていたが、それでも合わせて 6 人の定員である。それに対して、応募者 40 名弱。そして何よりも、みんなレベルが高い。冗談抜きで高い。逆にこの中から 6 人をどうやって選ぶのだろうかと思ったぐらいだ。そのときの私の心持ち。「このなかから選ばれなかったとしてもしょうがない。ただ、英語のスピーチやディスカッションができる場なんてそうないのだから、めいっぱい楽しもう。」

スピーチ。ディスカッション。面接。すべての選考が私にとってはとても心地よいものであった。面接がおわったときは、自分のできることを尽くしたような気がした。結果は気にしていなかった。ここまで自分が集中してある一つのことに取り組めたという達成感が気持ちよかった。とはいっても、やはり結果は気になるものである。結果を知らされたのは昼練の前。担任の先生がトコトコいつものように歩いてくる。そして「おい、岩崎-。あとで合格通知渡すからなー。」「???...!」そして私は嬉しさにびよびよん飛び跳ねる始末。なんとも、緊張感のない告知だった。(笑)

準備

準備で大変だったのは、分担である。少なくとも自分はそう思っている。筑附の二期制と麻布の三期制の違いは大きな問題であった。自分がやりたかったというのもあるが、結局プレゼンはすべて私が管理することになり、英語の原稿やスピーチのポイントなども Riko と私でやった。Youtube にスピーチの私の録音をアップロードして載せたぐらいである。なんか愚痴みたいだ。(笑)でも、達成感 6 月の後半になってストレスと寝不足で体調を崩したのも「今となっては」いい思い出。実際、賞はとれなかったが、私は日本のプレゼンが、日本の発表が一番だと思っているし、後悔はない。

プレゼンをつくる前の段階の話し合いも、とても過激なものになった。途中で方針が変わったこともある。外国人に日本の事情を話しても聞いてくれるのだろうか。Facil はどう

いう発表を要求しているのか。いろいろな要因が重なり重なって、プレゼンの構成や話す内容はどんどん変わっていった。まったく環境の異なる相手に自分の主張を伝える試行錯誤は、無駄ではないと思う。

そういえば、浅草に買い物に行ったときのマックで「頑張ってください」と言ってくれたお姉さんにまだお礼を言っていないなあ。

では先に堅いことから話していこう。

APYLS で楽しかったのは、バスとか自由時間のときのおしゃべりである。特に私が覚えているのは、**Ministry of Foreign Affairs** を訪れた後の戦争についての議論である。詳細は言及しないが、他の国の立場からの意見は興味深いと思った。普段の **Student Dialogue** の後の **Discussion** も白熱することがよくあった。また、韓国人の **Jean** に「韓国からしたら北朝鮮ってどういう存在なの？」と聞いたところ「本当にかわいそうだと思っている」と返ってきたのは意外だった。やはり、表面上だけではわからない事情が隠れているんだなということに気づかされた。

APYLS に参加して、シンガポールは “**very organized nation**” だなと感じた。(日本語での言い方が分からない、すみません。) 小さいからというもあるだろうが、なにかもが管理されている。新しい国だからなのだろう。人も新しい。シンガポール人の友達の親がシンガポールの国よりも年上だという話を聞いてなんだか不思議な気分になった。そして、ぶっちゃけたことを言うと、「シンガポールには住みたくない」と思った。なにかが足りなかった。それを吉沢くんに話してみたところ、「人工物が多いからかもね」と言われた。言われてみれば、日本は大阪や東京など発展している都市はあるものの、少し外に足を運べば田んぼやお寺など昔ながらの風景が残っていたりする。しかしシンガポールは、どこへ行っても建物ばかり。システムでいえば完璧だが、人間が住む場所としてはどうなのだろうか。

ひとつだけ、シンガポール人に質問してみたいことがあった。シンガポールでは、アパートの 70% は国が管理していて、引っ越ししたいときなどには、管理センターに行っても部屋が空いているかをチェックし、自分の住みたい部屋に応募する。地域の中の人種の混合具合などもうまく管理されている。そんな仕組みでできているのだが、ついこう思ってしまった。“**In Singapore, does house really mean "home"?**”

さて APYLS の思い出を話そう。

まず、友達が作れるかどうか不安だった。

Day 0 の Summit Briefing で動画を見せられたのだが、最後に

“81 delegates. 1 unbreakable bond.”

と書かれていた。本当に unbreakable bond ができるくらい仲良くなれるのか不安だった。結論を言おう。本当に、APYLS の絆は unbreakable. たった 10 日間でこんなに仲良くなれるのかというほどに、一生の絆ができた。9 月の今の時点で、3 組も再会を達成している。日本にも 11 月、12 月、1 月に韓国人とシンガポール人が来てくれるから楽しみだ。

ああ、そうだ。Facebook で APYLS JAPAN のグループを作ったとき、「もしかしたら公式のものあるんじゃないか？」と思って探したら見つかった。しかし非公開グループだったから、どうにでもなれと思って参加リクエストを送ったらなんと、承認された。やった〜とか思っていたけど、どうも私が一番初めの Foreign delegates で名前が知られていたというのを後になって教えられた。(笑)

英語の面に関しては、全く問題がなかった。Day 1 の Cultural Preparation Night でみんなが英語でぐったりしているなか、私は早く友達に会いたがっていた。そりゃ、シンガポール人の英語は意味が分からない言葉がところどころ出てくるし、インド人は発音になまりがあるし、そもそも自分はみんなと同じように話せないし。だけど、お互いに聞き合い、話し合い、そして夢を語り合う。そんなことができるのだから、言語の壁なんてなんでもなかった。

Day 8 の自由行動は、他のグループが Night Safari に行っている間、前からシンガポール人の Shi Quan と Jia Xuan と計画していたサイクリングに行くことにした。メンバーは全員シンガポール人、私だけ日本人。我ながらすごいところに飛び込んだなあと思う。私がシンガポール人と行動するようになったのは Day 6 ぐらいだったか。昼ご飯を買ってみんな丸くなって食べたり。MRT っていうどうもおかしなゲームをしたり。夜に Star Gazing に行ったり (車に轢かるかと思った)。ずっと一緒にいたから、私が Dining Hall に行つて座るところを探すときに、当たり前かのようにシンガポール人の間に入るなんて普通になっていた。サイクリングでずっと Airport の方まで走って帰ってきた後は、Hawker's shop でたくさんご飯を買ってみんなで分け合った。8 人もいたから量もたくさん。全部が辛かった。涙目でいつもジュースを飲んでた。(笑) 女の子の Ting En がこういつていた。”I know a lot of people are going to night safari. But if you do you are no more than a tourist.

Everyone should enjoy the local food! Hikari, you had a good choice.” (Yes food!) 的を得ているなと思った。帰りは、私のためだけに、MRT に乗ろうということになり、Bus → MRT → Bus と少し遠回りして帰ってきた。本当に、シンガポールの人々には感謝してもしきれないほどだ。君たちのことは絶対忘れない。君たちも、私のこと忘れる訳がない

よね。(笑)

Day 9の夜は、一番楽しい時間だった。Study Room と称された場所に、シンガポール人、マレーシア人と私で集まっているいろいろ話した。そのときは、どの国から来たかなんて関係ない、同じ高校生としてのおしゃべりだった。ぶっちゃけトークもしたりした。友達がまわりにいることが幸せで、時間が止まってしまえばいいのにとさえ思った。帰ることが嫌だった。しかし、話している最中にも他の国の代表がドアをノックし、別れを告げ、去っていく。最後の夜に涙を流し合いながら、絶対また会えると信じながら国に帰っていく。帰る方も見送る方も辛かった。

さて、APYLS は結局どういう場だったのか。

Summit という名前さえついているが、私はただの「会談」ではなかったと思う。シンガポールの制度についての説明も聞いたりするが、ただそれだけならやろうと思えば自分だけでもできる。本当に APYLS で一番大事なものは「人」だと思う。なにかの偶然、いやもしかしたら運命で同じ時に同じ場所を共有できたのはかけがえのない経験である。形式的な文章だなと思う。でも、実際本当なのだから。

Special thanks to Jia Xuan, Ting En, Zheng Lin, Shi Quan, Simon, Jun Yi, Yi Ning, Selina, Jean, Minjoo, Jisoo, Kevin, Zane, Terry, Kenneth, Clare... and everyone.

最後ではありますが、私にこのような貴重な経験をする機会を与えてくださった鎌倉先生、福元先生、麻布の村上先生に心から感謝いたします。先生方のおかげで準備も万全で満喫した時間を過ごすことができました。

面白く書こうと思ったけど、書いているうちにどんどん思い出に耽ってしまったなあ。1ヶ月以上経ったいまでも、毎日話している友達だっている。絶対この10日間は忘れないし、この絆は切れることはないだろう。また会う日まで。

81 delegates. 33 facilitators. 21 teachers.

1 unbreakable bond.

濱野倫太郎

はじめに

この文章を書く際に、どのような内容を書けばいいのか、随分と悩んだ。もし自分が APYLS に行く前にこの冊子を読むとしたら、どんなことを知りたいだろうか…。そんなことを考えながら、文章を練っていた。

やがて一つの結論に達した。「俺がわざわざ考えを巡らせて有益な情報を提供しようとしても、それは他の頭脳明晰な仲間がきっと書いてくれているだろう。わざわざこんなに苦しみ悶えて考えた内容が、もし仲間とかぶってしまったら？ 想像しただけでも恐ろしい。」そこで、どうせだったら皆が書かないようなことを、自分なりに書こうと思った。僕はこの日本チームの中で、たぶん一番ふざけた性格である。であるからして、僕はとにかく、他の皆が気にも留めないようなくならない事、変なことについて、ここで読者諸君に大いに語りたいと思う。

APYLS に行くまで

APYLS に参加するには、面接や、英語でのスピーチ・ディスカッションによる審査を受けそこで合格する必要があった。僕が APYLS の存在を知ったのは最初の説明会が始まる数日前で、「受かったらラッキー」くらいの感覚で説明会に臨んだ。説明会場（と言っても小さな会議室だが）に入ったらびっくりした。4～50 人ほどの、見るからに自分の数倍は頭によさそうな秀才たちが、和やかな雰囲気^{たなず}で佇んでいた。正直、その瞬間に、「俺は受かんないな」そう直感した。自分には、彼らより優れた点が一つもなかった。英語のテストをすれば、彼らは僕の 3 倍以上の点数を取るだろうし（これは僕の点数にも問題がある）、海外に打って出ていこうとする積極性も段違いだし…。ただここで卑屈にならなかったのが僕の唯一のいいところで、「英語のスピーチとかディスカッションさせてくれるんだったら、それだけでも英語力上がりそうだなあ。それだけでも得でしょ。」そんな気持ちで、審査に参加することにした。

審査には一生懸命に取り組んだ。あまり APYLS への切符をつかむ、というような執念はなかったが、手は一切抜かなかった。何よりも、スピーチやディスカッションのテーマが自分の好きな歴史・政治に関するもの（靖国神社参拝問題）だったので、「これだけは何とかしても言いたい！」という熱意が僕を駆り立て、熱弁を（聞くに堪えない英語で）振るわせた。スピーチやディスカッションでは、他の参加者たちの考えの奥深さ・英語の滑らかさにただただ驚き、大いに啓発された。このことだけでも、審査に参加した甲斐があったと思う。

参加者内定の知らせは、担任の福元先生から封筒で渡された。最初、その中身は、よくある集金か健康診断の結果か何かの手紙だと思っていたので、開けてみてびっくりした。正直その時は嬉しかったというよりは「どうしよう」という不安感が強かった。

APYLS 参加に内定してから

参加が内定してからはほかの日本チームのメンバーと何度も会ってプレゼンの内容を深めた。附属の女性陣二人とは面識がなかったし、麻布の三人に関してはもはやどんな髪の色の人たちかも想像がつかなかった（麻布生=髪の色ピンク という、今考えればある意味で失礼？なイメージを持っていた。「いったい彼らの髪の色はピンクなのだろうか、それとも緑か？」そんなイメージだった）。そのため麻布と最初の顔合わせをやるまでは不安でしかなかった。しかし一回目の顔合わせで「こいつらとは気が合う」という確信を持った。そしてこの確信は裏切られなかった（髪の色は普通であった。むしろ僕のヘアースタイルが一番奇抜であった）。その後は何度も何度も暇を見つけては会合を持ち、プレゼンの内容を討議した。実際に APYLS に行ってみると、事前にほとんど顔合わせも、スピーチ作成もしていなかった国があったが、今考えると僕たちはあの幾度もの会合でお互いの信頼関係を築けたのだと思う（APYLS の中で日本チームはかなりよくまとまったチームだった）。

APYLS にて

1. 英語について

僕は前述のように英語が得意ではないので、コミュニケーションをとる際はとても苦労した。特に聞き取りが難しかった。相手の英語は早いし、しかもネイティブのようなきれいな英語ではなく、国によって訛りのようなものがあるので、何回言われても何という単語を言っているのかさえ分からないこともあった。また、聞き取れてもその単語を知らなかったり、その状況でどんな意味を持たせているのかがわからなかったりしたことも多かった。そんなとき、僕は何度も聞き返した。しつこいほどに聞き返した。図々しいことだが、解かったふりをして会話を続けるよりは失礼ではないだろう。相手も僕に伝わるように一生懸命説明してくれた。ただ、五回聞き返しても分からないときはさすがに諦め次の話題に移った。本当は 10 回でも聞き返してもいいのかもしれないが、それでは会話がカオスなものになり過ぎてしまい成立しない。

これから世界の人と交流する人、特に英語が苦手な人は、次のことを意識してもらいたい。

- ① 一生懸命
- ② あきらめ
- ③ 単語力

①の「一生懸命」。一生懸命に伝えようとする。一生懸命に相手の言っていることを理解しようとする。これが何よりも大切だ。一生懸命やると、自分でも驚くくらいに伝わるし、わかる。また、一生懸命やると、相手も一生懸命になってくれる。これは日本人同士でも同じことだろう。「一生懸命」は、人間として相手から信頼を得る最低条件でもあるだろう。

②の「あきらめ」。いくら一生懸命やっても、伝えられないことも、相手の言っていることがわからないこともある。そんなとき、落ち込む人もいるかもしれない。でも、そこで落ち込むのは禁物だ。「まあしょうがないよな」という、一種のあきらめが必要だ。自分は一年前にオーストラリアに短期留学に行ったのだが、そこでは相手が何と言っているかほとんどわからなかった。そのため、「俺英語苦手だから、あんまりコミュニケーション取れないかなあ」「もし伝わったら・もしわかったらラッキー」くらいの心持ちでシンガポールへと向かった。英語が得意でない人はこのくらいの気持ちでいるほうがいいのかもしい。変に自分の英語力のなさに打ちひしがれるよりは、肩の力を抜いてラクになることが大事だ。ただ、これはあくまでも①の「一生懸命」が前提にあつてのことである。一生懸命やる前からあきらめ放棄することなど、無論ゆるされない。

③の「単語力」。英語に限らず、語学とは単語力なり。コミュニケーションをうまく取りたかったら、とにかく単語を覚えることだ。文法など分からなくてもまず問題はない。相手の英語だって文法が崩れていたりするがそんな時単語がわかれば何を言っているか容易に理解できる。逆に単語がわからないとアウトだ。何を言っているか本当にわからないし、自分から表現することもできなくなってしまう。ぜひ、単語力を鍛えてほしい。その時、名詞・形容詞を勉強することをおすすめしたい。動詞は身振り手振りでどうにかなる。ただ、もし現場でうまい単語が出てこなかったとしても、自分で簡単な単語を組み合わせて乗り切る努力をしよう。例えば、「予言する predict」がわからなかったら、「say correct happening which will be happened in the future」などと言えば（それがめちゃくちゃな英語でも）、相手は理解してくれる。

2. プログラムについて

プログラムは別途冊子の中に書いてあると思うが簡単に書く。印象に残っているのは日中に行われる政府・官公庁や政府系企業の見学、そして夜のスチューデントダイアログとその後のディスカッションだ。

官公庁見学では、外務省や最高裁判所、世界第3位の投資会社等、普段は入れないようなところをめぐり貴重な体験をさせてもらった。ただ自分は正直なところ、そのような場所でのほとんどの説明の意味は全くわからなかった。「全く」である。ときには「こんな感じのこと言ってんだろなあ」程度にわかるときもあつたが、そんな時は少なかった。だが、わからなくても、フリーの質問時間が与えられた場合には、積極的に手を挙げられたはずなのに、自分はそこで積極性を欠いたように思う。次に APYLS に行く人は僕と同じ後悔をしないように頑張してほしい。

スチューデントダイアログの場において、僕は世界の皆との英語力の差を一番に痛感した。スピーチの内容は、日本語できいても難しいようなものばかり。それが英語で来るのである。ただ、スピーチよりもディスカッションの方がもっと大変であつた。ディスカッションは、みんなが思ったことをポンポン言っていくので、今どんなことが場のテーマに

なっているのか理解するのが難しい。また、議論は普通の自由に質問できる場とは違って、議論の流れを理解していないと発言できない。最初僕はこのディスカッションには参加できそうもないと思っていた。そして実際そうだった。でもやっぱり悔しくて、日本チームの皆で夜に勉強会をして他国のスピーチの内容について議論したり、インターネット（部屋は Wi-Fi が繋がる）で調べたりして、前もって自分の意見を英語でいえるようにしてからディスカッションに臨んだ。すると議論の流れ位は見えてくるようになったしある程度みんなの意見は理解できるようになった。意見はいつ言うか（「今〇しょ！」）。いいえ、「今」ではありません。そんなノリでぶち込んだら、大変なことになる（笑）本当は議論の経過を見てその流れに合わせて言うもの。でもなかなかいい流れが来ないときは…話の切れ目に突っ込む！！議論が落ち着いたその時に、静寂を破り声高に「その件について僕はですわ！！」などと始めるのである。日本だったら変人である。しかし恐れることはない、年少少女の諸君。周りの皆は、あなたの英語力はわかってきている。決して変人だなんて思わない。みんな身を乗り出して聞いてくれる（もし僕がアメリカ人だったら確実に変人扱いされただろう）。

3. トラブル

シンガポールでは、様々なトラブルがあった。中にはくだらないものもあるが、その時は本当に焦ったこともある。今から見ればいい思い出だが、いやあ、本当に大変だったなあ。

いくつか下に紹介しよう。

Day いくつだったかは忘れたが、ある夜、僕たち日本人チームはマレーシアやシンガポールの子たちと一緒に、軽食パーティーをした。それぞれの国からお菓子やカップ麺などを持ち寄って一緒に食べた。とても楽しいひと時だったが、ただそれだけでなく各国の食文化の違い・宗教なども知るいい機会となった。僕達は日本のカップラーメンを持って行って皆に振る舞った。しかしマレーシアのイスラム教の子は、「それ豚入ってる？だとしたら…ごめんね」。確かに入ってる。くそう、考慮してなかった。こいつに日本のうまいもの食べさせてやりたいのに。また、シンガポールのカップ麺はとてもスパイシーだった。悲劇はここから始まる・・・

トムヤムの悲劇

シンガポールの子は、赤い唐辛子ベースのスープのカップ麺を手にしていて。トムヤムというらしい。日本チームの皆は皆分けてもらったのだが…。けんちゃんとハルキが、おいでノックアウトされていたのは覚えている。ナオキ氏はずっと日本のカップラーメンに夢中だったから食べてないんだよなあ、きっと。二人がほんのちよっぴり食べた後、僕の番が回ってきた。僕は二人より絶対いっぱい、それも余裕の表情で食べてやろうと、一口すすった……。麺が口に入らないうちに強烈な匂いが胃まで突き刺さる。「くさい」というものではない。何というか、痛いという言葉が合う匂いだ。それでも僕は調子に乗っ

て麺をずるずるとすすする。あまり辛くはない。「何だ匂いだけかよこいつう〜」。調子に乗った僕は、2, 3口、「悠々と」食べきって見せた。

その日の夜中からだ。どうにもこうにも腹が痛い。朝起きてみると、腹を壊していた。頭も痛いし、熱っぽい。次の日のプログラムは、正直、立っているだけでも辛かった。しかしそんなことは露ほども見せず、僕は友達に冗談を飛ばし、政治談議に花を咲かせ、その日を終えた。

無理がたたったのか、体に力が入らない。夕食もほとんど食べられない。というか、出てくる夕食は油が多いので、今の自分には向かない、そう思ってほとんど食べなかった（もっとも、「食べられなかった」）。夜になり自室に戻るとすぐに寝る準備を始めた。10時くらいには床に就いた。しかし僕の部屋はなぜか社交場のようになっており、4人部屋に15人くらい集まっていた。もちろんみんな楽しそうにおしゃべりをしているし、消灯時間を過ぎても明かりは煌煌と灯っている。2時間ほど、まんじりともできず…（この間、皆は僕に気を使ってきて声を潜めてしゃべってくれていた。でも僕としては、明るいのがつらかった。言えよよかった…）。この時の記憶はほとんどないが、途中、南アフリカのGuyに「これからピザ注文するんだけど、お前も食べるか？」って聞かれて、「ム…リ…、アリガ…ト…」と答えた事だけははっきりと覚えている。12時ごろになると、皆は解散していったようで、電気は消された。ここまでは新たな悲劇の序章に過ぎなかった・・・

殺人的寒波～恐怖のエアコン～

やっと暗くなり、僕はようやく眠りにつくことができた。シンガポールの室内は、寒い。その対策として厚手のパーカーを羽織り、下もジャージを履いて、さらにエアコンの設定温度も部屋の住人たちの了解を取り28度にし、万全の体制で眠りについた僕だったが…。

あれは何時ごろのことだったのだろう。眠っているにもかかわらず、体全体を刃物で斬られたかのような痛みを感じる。やがて、その原因は「寒さ」にあるのだと悟った。僕は身を切るような寒さの中で、朝まで夢と現実の間をさまよった。朝起きて一番に向かった先はトイレだ。この寒さで本格的に腹を壊してしまった。この後4日間ほど僕は腹痛に苦しみ、一日に10回以上トイレに行くことは当たり前となってしまった。トイレから戻ってくると、ドアを開けばなしにして出て行ったので、外の暖かい空気が流れ込み、部屋は暖かさを取り戻しつつあった。そんな中ふと部屋の鏡を見ると、昨晚の寒さを物語る衝撃的な光景がそこにはあった。夏のシンガポールで結露。もう一回。夏のシンガポールで結露。意味がわからなかった。同室のマレーシアの子に見せると、彼は一声鳥のような声で「Crazy!!!!」と叫んだ(上裸で寝ていた南アフリカの子は平然とした顔だったが…?)のを覚えている。

その前日も、そのまた前日も、25度設定ほどで、まあ快適に(上着を着て)眠ることができていた。ましてやその晩は28度設定である。まさかこんな惨劇が起こるとは思ってもみなかった。その日のうちに例のマレーシアの子と一緒にファシルに自室の惨状を訴えに行った。ファシルの子は風量や風向きを調節してくれ、次の日の夜からは快適に使えるようにしてくれたが、あの日の寒さは絶対に風の量や向きで変えられたものではなかったと思う。

次の日からは、僕が夜中にこっそりエアコンのスイッチを切っていたのは言うまでもない。

その後の4日間は体調不良が甚だしく、本当につらかった。夜に気分が悪くなり、トイレで吐きそうにもなった。また、昼間は頭痛・倦怠感がひどかったので立っているのも厳しいような状況だった。しかし途中からは頭痛薬を飲むことで症状はすっかり消えた(あの頭痛薬には本当にお世話になった)。ただ、もしこれから APYLS に行く人が僕のような状態になったら迷わず医務室に行くことをお勧めする。僕も医務室に行こうかどうしようか迷ったが、プログラムに参加できなくなることを恐れて自分の力で治そうとした。今考えれば、あんな状態でプログラムに行くより、しっかり治してから参加した方がよかったと思う。



惨劇の証人

突然すぎる愛の… ある夜、僕たち日本チームの男子と韓国チームの皆は、ディスカッションの行われた会場から寮まで一緒になって帰っていくところだった。そこで、韓国のある女生徒と僕の会話。

女生徒「このゴミどうしようかなあ」(手には使い捨てのフォーク)

僕「あそこにごみ箱あるから、そこに捨ててきなよ」

女生徒「ARIGATO！」

僕「サランヘヨ(愛してる)！」

一同「(ポカーン) …… !？」

あまりにも突然すぎる愛の告白である。脈絡というものが一切ない。恋はジェットコースターなんて言葉があるが、そんなもんじゃない。何なんだ一体。これはどういうことか。濱野は異国の地で恋の熱に浮かされてしまったのか。

事実を言うと、そうではない。僕は、女生徒(後にまた出てくる Jean という子なのだが)

が日本語で「ありがとう」と言ってくれたので、お返しに韓国語で「ありがとう」と返そうと思ったのだ。当時、韓国語を彼女たちからちょびっと教わったばかりだったので、知っている言葉は「アニョハセヨ（こんにちは）」「サランヘヨ（愛してる）」「カムサハムニダ（ありがとう）」の3つくらいだった。そこで僕はちょっとこんがらがってしまったのだろう。「カムサハムニダ！」と言うところを「サランヘヨ！」と言ってしまった。しかもハイテンションだったのでかなり勢いよく叫んでしまったため、本当に「愛してる！！」と愛を叫ぶような形になってしまった。僕は最初自分の犯したミスに全く気付かず、皆に冷やかされても、何のことだかわからない。やっとわかったときには、顔は真っ赤、汗たらたらになってしまった。Jean もからかわれてたし、僕もからかわれてたしで、何とも変な空気になってしまった。いやあ、恥ずかしかった。今となってはいい思い出だが、この経験が僕を韓国語学習に駆り立てたのは言うまでもない。

4. 友達との思い出

APYLS では本当にいろいろな国の子と友達になった。参加者全員に本当にお世話になったのだが、その中でも特にお世話になった人を挙げて感謝の意を表したい。同室の3人、特にマレーシアのZaneにはいろいろとお世話になった。彼には僕が体調を崩した時にはよく気遣ってもらった。たった10日間一緒に過ごただけだったが、彼の心根の優しさは容易に窺い知ることができた。とつても優しいインドのRaghavan。マイペースで、時折見せるひょうひょうとしたところが面白かった。彼と一緒にいるとなんだか心が休まった。インドネシアのKevin。彼とはそんなにしゃべったわけではないが、なぜか気が合った。シンガポールのSelina。彼女には本当にお世話になった。僕の拙い英語を一生懸命聞いてくれたし、僕にわかるよう話をかみ砕いて説明してくれた。彼女と話していると、海外でどうしても消極的になってしまう自分の心が、積極性を取り戻していく、そんな気がした。一番よく話したのは、韓国と中国の皆かな。Selinaも含めて、皆で歴史問題や領土問題について語り合った。APYLSに来るぐらいだから当前なのかもしれないが、皆諸問題に対しては宥和的で、お互いの国を尊重しあった話し合いとなって、とてもすがすがしかった。政府間では一番仲が悪い日本と中国、日本と韓国が、APYLSでは一番仲が良かった。これはどういうことだろうか。中国の皆、韓国の皆と会えた偶然に、あるいは運命に感謝したい。

印象的だったのは、Day1の学校見学でのことだ。僕は、韓国のJeanに、従軍慰安婦問題のことで、強制連行の有無にかかわらず韓国の女性たちを日本が傷つけてしまったこと、そして日本では従軍慰安婦問題に関して韓国に向けて心無い声がたくさん飛び交っているような現状があることを挙げ、「一人の日本人として、申し訳なく思う。ごめんね。」と言った。するとJeanがとても驚いて「あなたがそんなこと言う必要なんかないわ」「そんなこと言わないで」と言った。このことを他の人がどう捉えるかはわからないが、僕はこのとき安心した。何に安心したのか。韓国の人を好きになれると思った。だから安心した。そして不意に泣きたくなった（そして、逆に今までいかに自分が国内の過熱した虚な韓国

論に感化されていたかを思い知った。僕は自分を親韓的だと思っていたが、心の片隅に、言葉にできない韓国の人へのモヤモヤを抱えていたのだろう)。彼女の言葉は、僕の中で一生生き続けるだろう。

これから APYLS に行く人へ

いくつか伝えたいことがあるので以下にまとめて書く。

- **胃薬は強いものを** まず、胃薬は必須。僕はもっていかなかったので、途中で福元先生に正露丸をお借りした。ただ、正直に言うとあまり効果はなかったように思う（福元先生すみません！汗）。正露丸糖衣 A（正露丸より強い）がお勧めだ。そういえば、昔よく東南アジアに出張に行っていた祖父は「糖衣 A じゃなきゃあ効かないんだ、あっちの腹痛は普通の正露丸じゃあ効かない」と言っていた。
- **医務室にすぐ行こう** 僕の今夏の経験上、無理してもいいことはない（キッパリ）。朝になったらトイレで死んでた、なんてことになったら本当にシャレにならないので、体調が悪くなったら医務室に行くなり先生やファシルに伝えるなりしよう。
- **外国のことをよく勉強して行こう** 「グローバル社会になって、英語が話せるだけで国際交流が進む、いい世の中になったわねえ」なんて思っているそのあなた。NO NSENSE!!! 全く逆だ。グローバル化で「英語は出来るのが前提」な世の中になった。むしろ、英語以外の分野に、もっと造詣を深めることが必要だ。例えば、各国のあいさつ。外国の子は日本語の単語をたくさん知っている子が多く、「コンニチハ」「アリガト」「カワイイィー——」などの言葉を何度も言うてくる。当然、僕ら日本人としては、日本語で話しかけられると嬉しい。きっと逆も成り立つだろう。僕はもっとさまざまな言語を勉強したいと思った。また、語学に限らず、外国の子は日本についてとても詳しい。外国の子が「日本って、こうでしょ、ああでしょ」と言うてくると、本当にうれしかった。一方で、自分は相手の子の国について何にも知らない。そのことがとても申し訳なく思った。それとは別に、交流していく上で単純に相手がどんな国から来たのかを知りたくもなった。日本にいるうちに参加国のことについてよく勉強しておくべきだ。
- **あっちの寒さは半端ない** シンガポールのエアコンは、色々とおかしい。「エアコンは 23 度に設定しましょう」なんて張り紙があるくらいだ。シンガポールの夜は、日中の暑さからは考えられないほど涼しい。きっと市中に緑がたくさんあるからだろう。だから、夜はエアコンを切っても寝られる。僕は最後の 3 日間くらい、エアコンを切って寝ていた。あっちについたら、ルームメイトと交渉して出来るだけエアコンを切る方向にもっていこう。ただし、中にはとても暑がりな子もいるので、そうした子と同じ部屋になる場合も考慮して、上着は真冬用のものを持っていこう。できれば羽毛布団を持って行ってもいいくらいだ（マジで）。ちなみに、あっちには上掛けはないものとして考えてよい。それくらい薄い（というかハンモックみたいな、網目がとっても

粗い) 布が一枚あるだけである。

- **ポジティブに・積極的に** 最後にこれだけは伝えたい。あっちでなんか失敗してしまっても、うまくいかないことがあっても、そんなのはたいしたことじゃない。常に次のことに向かって一生懸命取り組んでいこう。そして、失敗を恐れるのも良くない。失敗したって誰も気にしない。むしろ、失敗したらそれが友達との話のネタになる。失敗はどんどんして行こう。積極性を失うより、100 倍いい。後悔だけはしないように、皆さん頑張ってください。

最後に

最後に、今回僕を支えてくれたすべての人に、感謝したい。羽田空港第 2 ビルの駅員さん、JAL の受付カウンターのお姉さん、税関の怖そうなおじさん、— (このペースでやっていると終わらないので中略) — ファシルの皆、Delegates の皆、そして何といても日本チームの皆。スピーチの原稿から読み方の指導まで、本当に岩崎がいなかったら、正直、日本チームの Student Dialogue はどうなっていたかわからない。最後までお世話になりました。ありがとう。由地さん。彼女の、皆をまとめる力は本当にすごかった。勉強会の時にコックリコックリしながら「全然眠くないよ！」と言うのを聞いたとき、本当に頑張り屋さんなんだなあと思った(なんか上からみたいでごめん)。ありがとう。けんちゃん。君とは本当に気が合う!! 考えてみれば、すごく趣味が似てるよね。たぶん君とは話題が尽きないと思います。今度、また君とおしゃべりしたいです。大人になったら、一日飲み明かそう(笑)。けんちゃんがいたから、外国の子ともたくさん政治談議ができたと思う。心強かったよ、ありがとう。ハルキ。第一印象はまじめな好青年。そしてその印象が崩れることは終始なかった。本当に純粋で、まじめで、日本チームに欠かせないキャラクターだった。「カワイイ」と世界の場でも評判だったのは、彼のこうしたところにあるんじゃないかな。君のまじめさが日本チームを何度も救いました。ありがとう。ナオキ氏。君には本当に(君は気づいてないだろうけど) いろんな場面で助けてもらったし、あこがれる場面もいくつもあった。色々いいたいことはあるけど、とにかく君と一緒にいるといつも楽しかった。一緒にいてつまらなかったことは一時としてなかった。楽しい時間を、ありがとう。

また、今回、この APYLS の場をセッティングしてくださった関係者の皆さん、筑波大学附属高校・麻布高校の先生方、特に引率の先生お二人には大変お世話になりました。福元千鶴先生にはいつもながら大変優しくたいへん温かく見守っていただき、本当にありがとうございました。また村上健先生は個性あふれる先生で、また気さくに話しかけていただいて、ご一緒にできて楽しかったです。本当にありがとうございました。

今回、僕は APYLS に参加できたことに本当に感謝している。APYLS が僕の人生を変えた。今回得た貴重な体験をより発展させるために、これから勉学に、またほかのさまざまなことに心血を注いで打ち込んでいきたい。

2014 年 8 月 27 日 宿題の期限が迫る中、自宅書斎にて

Don't forget the teachers!

APYLSに参加するまでも、参加している間も、参加した後もとにかくお世話になる先生方。今回引率して頂いた、筑附の福元先生と、麻布の村上先生に感想を書いていただいた。

APYLSの引率をして

筑波大学附属高等学校
教諭 福元 千鶴

APYLSは、同世代の他の国・地域の人たちとの交流を通して、学びを深める、という目的で行われています。その交流がなるべくスムーズに行われるための最高の環境が Hwa Chong の先生方、ファシリテーターによって整えられていたことは、みなさんが実感として感じたところでしょう。その9日間の日程+αを終えて、みなさんはどんな感想を持ちましたか。APYLSへの参加を希望したとき、出発前に参加するにあたって決意していた当初の目的は達成できましたか。もちろん、漫然と参加しても得られるものは多かったと思いますが、意識して臨んでいればさらに大きな学びができたのではないのでしょうか。

APYLSの様々なプログラムを通して、やはり一番知ることができたのは、シンガポールについてではないのでしょうか。観光地以外の施設にも行き、シンガポールの人や食文化、制度等について多くのことを知ることができましたね。また、シンガポールを知ること自分たちの住んでいる日本についても目を向けるきっかけになったのではないのでしょうか。

そのような経験の中でとらえたシンガポールについて皆さんはどんな国だと表現しますか？私が、施設に行ったり話を聞いたりする中で感じたのは、シンガポールは「前向きな国」だということです。これは、観光目的だけで訪れていたらきっと感じることはできなかつたと思います。私がこれから海外に行くとしたらそれは観光でということがほとんどでしょうから、私自身にとってもとても貴重な経験になりました。また、各国の先生方と話をする中で、国民性ってあるのかなのか…などと、考えさせられることが多かつたです。



さて、生徒の皆さんの日程・アクティビティを見ていてまず思ったのは、「盛りだくさん」「忙しい」というものでした。もっとも、皆さんは、そんな盛りだくさんの内容に流され

ることなくいろいろな場面で、積極的に周囲と関わりながら活動していましたが。Student Dialogue や Summit Dialogue などあるテーマがあって、それに基づいてディスカッションをするという経験一つとっても、同じような環境のもとで育ってきた人たちとの議論では得られないような観点を得られたと思います。そして、そのような設定された学びの場だけでなく、各国の人たちと日常生活を一緒に送る中で得られた視点は多いのではないのでしょうか。朝から夜まで一緒に行動をするなかで、生まれた連帯感は非常に濃いものであったと思います。その繋がりの強さは、最終日の Farewell Party の最後の皆さんの様子でもよく伝わってきました。APYLS での学びが「生かされる経験」は無尽蔵だと思いますが、今回築いた関係より強固なものにできるように、是非今後も繋がりを大事にしていってください。

これからも積極的に学んでいってください。皆さんのさらなる活躍を祈っています。

APYLS 総責任者 Seow 先生のお話し。「10 年以上前に外務大臣からフアチョンの校長に『なにか世界中の高校生を集めた教育的なイベントができないか』という打診があった。校長はその新企画の担当に私を任命した。私は既にあった他のイベントを色々見学して新しい企画を練った。各国の高校生が集まって議論するイベントはあったが、議論以外に生徒が仲良くなるような時間が少ない。観光を中心として生徒が仲良くなるイベントはあったが、知的要素が足りない。そこで私は両方の要素をふんだんに取り入れて APYLS を立ち上げた。第 1 回の APYLS は 14 日間に及ぶ長丁場だったが、あまりに長過ぎるということで今の 9 日間になった」

第 1 回の APYLS 以来日本からは毎年同じ 3 校（麻布、筑附、下関西）が招待されてきた。私を含めそれを当然のことと考えていた者は多いと思う。しかし今年から日本の参加は 2 校のみとなった。過去の参加国、参加校を見ると少しずつ変化してきていることが分かる。同じ 3 校が 7 年間変わらず参加してきた日本は、どちらかと言えば例外的な存在だったようだ。

APYLS の教育的価値は計り知れない。このイベントに生徒を派遣することは「特権」と言っても過言ではないだろう。この素晴らしいイベントに参加できる日本人学生の数をこれ以上減らしてはならない、と強く感じた。筑附は双方向の交流によって APYLS 開催校のフアチョン学院と強い絆を築いている。麻布の場合はどうか。「もう日本からは筑附の 1 校だけでよい」と思われたいだけの貢献をしているだろうか。

参加校の一番の貢献は、代表生徒が全力でイベントに取り組み、日本人というバックグラウンドを踏まえた知識や意見を世界の代表たちに発信することだろう。この点はあまり心配していなかったし、立派にこなしてくれたと思う。やはり麻布生や筑附生は優秀だ。世界の舞台に出して恥ずかしくない見識と意欲を備えている。では引率教員の私には何ができるのか。

私はそれを「積極的にフアチョンの先生方や生徒達（ファシリテーター）と関わり、人間的な絆を築くこと」と考えた。今までの色々な海外校との交流を見ても、教員同士が仲良くなり行き来がある場合は交流が長続きしている。逆にそのような人間的な関係が薄い交流は脆い。国の経済状況や学校の教育内容の変化に伴って交流が終わってしまうことがある。

また私は趣味のオセロゲームを通じてそのような人間関係を強化し、さらにサミットにも貢献できると考えた。オセロはルールがとても簡単で、あまり言葉が通じない人同士でも気軽に楽しむことができる。そして上達すればするほどどんどん考えるべきポイントが増え、一生かけても極め尽せない奥の深さを有している。1対1の完全情報ゲームで運の入る余地もない。負ければそれは全て自分の責任である。自分の力を謙虚に見つめざるを得ない厳しいゲームであり、それ故にまた勝った時の喜びも計り知れない。オセロは非常に教育効果の高いゲームだと思う。

私の予想通りオセロは生徒達の心をつかんだ。サミットも後半になるとダイニングホールで食事をしながらオセロを楽しむ生徒の姿をよく見かけるようになった。「オセロのおかげで知らない国の生徒と仲良くなれました」という嬉しい言葉も聞くことができた。またフアチョンのゲームクラブの生徒とオセロを打つ機会もあり、Seow先生からは「こんどシンガポールに来る機会があったらぜひ連絡をください。うちの生徒達にオセロを指導してくれたら無料で寮に泊めてあげます」という有難い言葉をいただいた。

今回の引率は私にとって2回目であり最後である。最後と言うのは、このような素晴らしいイベントには私よりも若い先生が多く参加すべきだと思うからだ。そのことも踏まえ、私にはもう一つの目標があった。それは記録である。前日も多数写真を撮ったのだが、結局あまり他の人とシェアすることもなく埋もれてしまった。せっかくこのような有意義なイベントに参加するのだから、自分のため、参加した他の方々のため、そしてこれからこのサミットに参加するかもしれない方々のためになるべく詳しく、そして見たい人がすぐに関覧できるような形で記録を残したいと思った。私のブログ「村上健のオセロ日記」にこのサミットで撮影した写真や動画や文章をアップすることによって、この目標もある程度達成できたと思っている。

最後にメンバー選考について一言。麻布のメンバー選考は毎年4月当初に行われてきたが、これはちょっと遅すぎるように感じた。来年以降は2月中に選考するのが良いと思う。今年はメンバーに帰国子女が入っておらずやや心配だったが、英語力で皆をリードする四元君、幅広い知識と調整能力で皆をまとめる吉沢君、積極的に友人を作って皆の交流範囲を広げる窪田君、の3人がそれぞれの持ち味を生かしてチームとなり、筑附のチームとも連携して日本代表の大役を無事に務めてくれた。皆さん、本当にお疲れ様でした。

Postscript

僕はこの場を借りて APYLS への思いを全て吐き出そうと思う。

単刀直入に言うと、APYLS を知った日から APYLS について考えなかった日は一日たりとてなかった。それでいて事前準備、期間中、そして帰国後も含め、一度も"苦"を感じたことさえない。もちろんプレゼンの準備、Student Dialogue など幾度となく苦難に陥ったことはあるものの、それらは APYLS に参加することを僕に"苦"として考えさせたり、ましてや後悔させるということは絶対になかった。それは APYLS が僕には余りある程の機会であるということに加え、僕をいつでも助けてくれた日本チームの五人のおかげだ。僕が彼らに何か与えられたかといえば疑問だけれど、今では彼らと過ごす時間はとても居心地が良い。僕が APYLS に熱を入れ始めたきっかけはホームページに掲載されていた、2012 年に参加した先輩方の文集を読んだ時だった。それまで揺らいでいた APYLS を目指す決意がその時はっきりした。世界の代表と共に活躍する先輩方の姿に感銘を受けたことももちろん確かだが、何よりも日本チーム全員が最高の仲間と言い合えることが羨ましく、且つ憧れだった。今回の日本チームは誰かが羨ましく思うような、憧れるようなそんな素敵なお仲間になれたのだろうか。少なくとも僕は何度も他五人の才能を羨み、憧れたことだけはいっておきたい。

現在の国際社会には、移民問題、人口問題、性差別、検閲の規制、核問題など社会問題が山積みだ。これらの影響で国家間に亀裂が生まれ、距離ができ、捻じ曲げられた情報が錯綜する。世界には APYLS に集まった代表のように素晴らしい人達がたくさんいるはずなのに会う機会が失われていく。こんなに悲しいことはない。僕はこれから世界中の人に会って少しでもこの状況を打破するために貢献したい。

最後に。日本チームがこの六人で本当に良かった。いつかまたサイゼリアでも、世界のどこかの高級レストランでも、アマゾン川でも、再会することができたらどんなに素敵なお仲間だろう。

2014 年 9 月 17 日
麻布高校 窪田直希

8th HC-APYLS 2014 日本チーム 文集

2014年 8月30日 初版発行

2014年 9月10日 第2版発行

2014年 9月25日 第3版発行

2014年10月 8日 第4版発行

著者 窪田直希 吉沢健太郎 四元春輝 村上健
岩崎光里 濱野倫太郎 由地莉子 福元千鶴

編集者 四元春輝 窪田直希

発行者 麻布高校 筑波大学附属高等学校

連絡先 麻布高等学校

〒106-0046 東京都港区元麻布 2-3-29

TEL 03-3446-6541

乱丁・落丁本は可能な限りお取替えいたします。

81 delegates, 1 unbreakable bond!

